

主要面談者リスト

日本側関係者

在オーストリア日本大使館	上田一等書記官
在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館	小滝大使、室谷書記官、齊藤専門調査員
エコツーリズムM/P調査団	(株) パシフィックコンサルタンツインターナショナル 総合開発事業部 次長 伊藤金雄氏
JICAオーストリア事務所	村岡所長、伏見所員

国際機関、国内機関、NGO等（アルファベット順）

Agricultural Cooperative Agropodorina in Gorazde	Mr.Sukrija Basic (Director)、 Ms.Nasiha Dzaka (Deputy Director) Mr. SLAVKOPGEVAGIC
AGROS	Mr.Mico Stanojevio (Owner), Mr. Helix (Manager)
BEKTO	Mr. Ahmo ADZOVIC (Director)
Boskovic Brankica	Ms. Aktivnosti Vejavc
Bratunac Cooperative (ZZ)	Mr. Branislav Micic (Director)
Bratunac Municipal Return Commission	Returnees C (Mr.Jarkovich Strahinja, Mr.Gdich Azurir)
CARTAS	Dr.Monique Frey (Delegate Agriculture project Eastern Bosnia 専属獣医師)
CEFA/Agropodrina	Mr.Aliladic Haris(YD Director), Mr.Suad Alic (Financial expert)
Collection Centre (C.C.)	Ms. Vesna Zajrvić (UNHCR Field staff、 UNV)
Danas Sutra	Ms.Nada Jovanovic (president)
Federal Ministry Displaced Persons and Refugees	Mr. Avvija Muhović (Assistant of Minister)、 Ms. Sabira Jahić
Gorazde Canton	Mr. Salko Obhodas (Cantonal Prime Minister)、 Kenan Kanlic (Head of dep. for management and coordination of development resources) 他(議事録参照)
Gorazde Municipality	Nihad Hadziahmetovic (Director MPI 'MLIN'), Esad Kulenida (Board for Return, Agriculture engineer), Kanlic Kenan (Head of dep. for management and coordination of development resources), Fadil Salkovic (Senior advisor/ Gorazde Municipality) 他議事録参照
International Rescue Committee (IRC)	Mr.Nusret Osmanspahic (Field Coordinator)
Linking Agriculture Markets Producers (LAMP)	Mr.Armin Kloeckner、 Ms.Sabaheta Cutuk (政策アドバイザー室)
Milgor	Ms.Vasvija Halac
Ministry of Human Rights and Refugees: MOHR	Mr.Mujo Jejna(Assistance Minister)
OHR	片柳 真理 (Political Adviser)
OHR Bratunac	Mr.Darko Sekulic,
OSCE Bratunac	Mr. Peter Spremo (Education Officer),
Regional Board in Gorazde	Mr.Himzo Bajrovic (President), Ms.Dahiborka Milovic (Account)
Srebrenica Business Centre	Ms.Nada Jovanovic (president)
Srebrenica Cooperative (ZZ)	Mr.Salimovic Mirsad (president), Budiwir Maksiuovic
The Fruit freezing plant in Kopaci	Mr.Slobodan Rakanovic (Chief of Production)
UMCOR	Mr.Aleksandor Stojkruvit
UNDP Sarajevo	Ms. Hideko Shimoji、 Ms. Sabina Žunić
UNDP Srebrenica Regional Recovery Programme	Mr. Guy Dionne, Mr. Danijela Huseinbasic, Ms.Danijela Huseinbasic (Local Government Coordinator)
UNHCR Sarajevo	Mr.Udo JANZ (Representative), Mr. John Farvolden (Senior Programme Officer)
UNHCR Srebrenica Office	Mr.Meredoc McMinn
UNHCR Tuzla Office	Mr. William Tarpai (Director), Mr. Midhat Mujanovic
University of Sarajevo 農学部	Vjekoslav Vekoslav Selak学部長 他5教官
USAID	Mr. John Mackillop
USAID LAMP	Mr.Darko Sekelic
USAID Sarajevo	Mr. Peter S Flynn (Sr.Program Coordinator), Mr. John H.Seong (Director, Economic Restructuring Office)
Veterinarinarska (家畜保健所)	Dr.Enver Borovina (所長)
The WORLD BANK Sarajevo	Mr. Goran Tinjic

農家・酪農家個別訪問記録

訪問先：酪農家 ゴラジュデ フィリボチ地区
 日時：11月2日（火）9：10
 対応者：USOMURATOVIC さん（男性、妻が対応）
 調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：32 戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業が 95%
- ・ 戸主年齢：56 歳
- ・ 学歴：小学校卒
- ・ 家族：妻 60 歳 長男 32 歳 長女 30 歳（夫が戦争で亡くなったため実家に戻っている）
- ・ 土地面積：0.1ha（地域では平均面積）
- ・ 当地在住期間：約 40 年。戦時中はゴラジュデ市内で空き家になっていた店に非難していたが 1996 年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：電気関係の職人。家では 2 頭の乳牛を飼養しながら、自給野菜を栽培していた。オランダ(DRC)から牛をもらってから酪農を再開。
- ・ 飼養状況：搾乳牛 1 頭、シンメンタール。牛の名前はオルガで、4 産目を 2 月に予定。11 時から 5 時ごろまで放牧している。牛体高 138cm。子供のころから酪農の経験があったので、オランダ (DRC) から牛を寄付されてもすぐ慣れた。牛糞はすべて畑に還元している。床には敷きワラがしてあるが、乳房に糞が付着。
- ・ 作業用機器：特になし。
- ・ 飼料の種類と給与方法；野乾草をメインに、りんご、飼料用かぼちゃ、かぶ、家畜ビート等に配合飼料を混入したものをなべで煮て与える。どぶ飼い。朝搾乳前・夕搾乳前が基本だが牛が欲しそうな時はいつも与えている。飼料の量はとくに測ったことがないので分からない。バケツ給水式。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg 月 2 袋購入。
- ・ 搾乳時間と平均乳量：手絞りで朝 7 時、夕方 5 時搾乳 14～15 リットル。
- ・ 牛乳販売先：生乳はすべて自家消費。
- ・ 作業分担：夫と息子さんが牧草刈り取りと乾草づくり。妻が牛管理。
- ・ 組合との関わり：特になし。以前りんごの苗木の分配の話があったが、抽選にもれてからは接触していない。
- ・ 現在の問題：耕運機があれば作業が楽になる。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。

訪問先：酪農家 ゴラジュデ フィリボチ地区

日時：11月2日（火）10：20

対応者：チュルツ ソイホさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：32戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業が95%
- ・ 戸主年齢：68歳
- ・ 家族：妻62歳 長男・二男共にサラエボ在住 長女はアメリカ在住。
- ・ 土地面積：0.15ha
- ・ 当地在住期間：約55年 戦時中はドイツに非難していたが1997年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：戦前は消防士。戦前は酪農もやっていた。
- ・ 現在の職業：年金が主な収入源。
- ・ 飼養状況：現在はヤギを7頭飼養。妻が病気がちでヤギ乳が身体に良いと聞いたので始めた。
- ・ 作業用機械：チャッタ付耕運機。IRCからの供与。
- ・ 飼料の種類と給与方法：野菜くず、りんご、飼料用かぼちゃ、かぶ、等にパンくず、配合飼料を混入したものをなべで煮て与えているが量は分からない。どぶ飼い。バケツ給水式。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝6時、夕方6時搾乳 最大4~5リットル。手絞り。
- ・ 販売先：生乳はすべて自家消費。バター、チーズも作っている。（自家用）
- ・ 作業分担：すべて一人。
- ・ 組合との関わり：特になし。戦前は組合に生乳を販売していた。
- ・ 現在の問題：できれば息子にあとをついでもらいたいが、当地では仕事がないことが問題。

訪問先：酪農家 ゴラジュデ カザキチ地区

日時：11月2日（火）11：00

対応者：JUSUFOVIC ESADさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：50戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業が95%
- ・ 戸主年齢：51歳
- ・ 学歴：中学校卒
- ・ 家族：妻50歳 長男・二男（農業高校在学中）・長女・二女・三女（中学生）

- ・ 土地面積：14ha
- ・ 当地在住期間：約23年、戦時中はサラエボ近郊に非難していた。1997年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：建設会社に勤務。戦前から4頭の乳牛を飼養しながら、自給野菜を栽培していた。
- ・ 飼養状況：搾乳牛3頭、シンメンタール。1頭はオランダ（DRC）からの寄付だが、2頭は自分で購入した。日中は放牧。牛体高140cm、152cm、136cm。子供のころから酪農の経験があったので、オランダから牛を供与されてもすぐに慣れた。牛糞はすべて畑に還元している。牛床には敷きわら等は敷かない。時折スコップで掃除するのみ。
- ・ 作業用機械：耕運機が1台
- ・ 飼料の種類と給与方法：野乾草をメインに、りんご、飼料用かぼちゃ、かぶ、家畜ビート等に配合飼料を混入したものをなべで煮て与える。朝搾乳前・夕搾乳前が基本だが牛が欲しそうな時は与えている。飼料の量はとくに測ったことはないので分からない。バケツ給水法。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝7時、夕方6時搾乳 平均18リットル/頭。手絞り。
- ・ 販売先：以前はミルゴールに販売していたが乳代金の払いが悪いのでやめた。現在は知人のディーラーに販売している。値段は1KM/リットル。最近ミルゴールへの乳販売をやめた人が増えている。
- ・ 作業分担：夫が牧草刈り取りと乾草づくり。妻が牛管理。
- ・ 組合との関わり：特になし。戦前の組合はいろいろなものを扱っていて非常によかった。カタツムリも買ってくれたが、今の組合は融通がきかない。
- ・ 現在の問題：耕運機があれば作業が楽になる。
- ・ ワークショップに関する関心；ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。

訪問先：酪農家 グラジュデ パウンシェ地区

日時：11月2日（火）11：50

対応者：BAJRAKAREVICさん（女性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：18戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業が80%
- ・ 戸主年齢：42歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻42歳 長男・二男（小学生）
- ・ 土地面積：1.5ha
- ・ 当地在住期間：夫25年間、妻5年間

- ・ 戦争前の職業：水道局のドライバー。戦時中はサラエボ近郊に非難していた。2000年に結婚。
- ・ 飼養状況：搾乳牛2頭。シンメンタールとボスニア牛。オランダ（DRC）から牛と羊の供与があったが、羊は手間がかかるので自分で牛と交換した。日中は放牧。牛体高146cm、136cm。牛糞はすべて畑に還元している。牛舎の2階に乾草庫をそなえているのでいつでも牛に給餌できる。バケツ給水式。牛床にはおがくずを敷く。
- ・ 作業用機械：耕運機が1台
- ・ 飼料の種類と給与方法：野乾草（50kg/頭）をメインに、朝・夕搾乳前に 飼料用かぼちゃ、かぶ、家畜ビート等に配合飼料を混入したものをなべで煮て与える。正確な量はわからない。どぶ飼い。
注）乾草50kgということはありません。計量器がないのであいまいな数値になる。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝7時、夕方5時搾乳 30リットル/頭。手絞り。
注）30リットルは希望的数値ととらえたほうがよい。
- ・ 販売先：以前はミルゴールに販売していたが乳代金の払いが悪いのでやめた。以前はミルクポイントまでミルゴールのトラックが集乳に来たが現在はそれもなくなったことも原因。ミルクの販売よりもチーズを作って販売したほうが良い。
- ・ 作業分担：夫が牧草刈り取りと乾草づくり。妻が牛管理。
- ・ 組合との関わり；アグロポドリナ組合の組合員。野菜栽培の相談にのってもらっている。
- ・ 現在の問題：ミルカーを導入して搾乳したい。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 将来：子供にも農業をやってもらいたい（子供はサッカー選手になりたいらしい）。

訪問先：酪農家 ゴラジュデ ゴラジュデ地区

日時：11月2日（火）14：30

対応者：FEJEIC FADIL さん

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：45戸
- ・ 地域住民の職業割合：ほとんど農業
- ・ 戸主年齢：73歳
- ・ 学歴：小学校卒
- ・ 家族：長男（45歳）・孫（23歳）
- ・ 土地面積：1.5ha
- ・ 当地在住期間：50年間

- ・ 戦争前の職業：会社員をやりながら、3頭の牛を飼っていた。戦時中もゴラジュデ。
- ・ 飼養状況：搾乳牛3頭。シンメンタールとボスニア牛で、日中は放牧。牛体高136cm、146cm、148cm。牛糞はすべて畑に還元している。牛床にはおがくずを敷く。
- ・ 作業用機械：耕運機が1台。
- ・ 飼料の種類と給与方法：野乾草をメインに(30kg/全頭合計) 飼料用かぼちゃ、かぶ、家畜ビート・ビートパルプ等に配合飼料(2-3kg)を混入したものをなべで煮て与える。給与回数は4-5回/日。どぶ飼い。
牛の鳴き声で空腹かどうか分かるのでその都度与えている。バケツ給水式。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝7時、夕方5時搾乳 15リットル/頭。手絞り。
- ・ 販売先：自分はミルゴールの最初の契約者だったのに牛乳の回収にこなくなったので非常に困っている。昨日も牛乳50kgを廃棄した。対策としてできるだけ近所の人を買ってもらおうことにしている(1.0KM/リットル)。
- ・ 作業分担：息子と孫の3人でやっている。
- ・ 組合との関わり：特にない。
- ・ 現在の問題：クレジットの返済が苦しいので牛を売却しなくてはならないかもしれない。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 将来：孫にも農業をやってもらいたい。

注) 当牧場は、オランダ(DRC)の乳牛配布プログラム時にモデル農家に選定されて、ワークショップの開催地になった農家である。牛舎はモデル牛舎としてオランダ側が建設したもので、給水器は破損して使用されていなかったものの、飼槽、牛枠等の設備は整っていた。

訪問先：酪農家 ゴラジュデ デビジュユダ地区

日時：11月2日(火) 15:30

対応者：SLAVKOPGEVAGICさん(男性)

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：40戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業が95%
- ・ 戸主年齢：41歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻40歳・長男19歳・二男18歳・三男18歳
- ・ 土地面積：14ha
- ・ 当地在住期間：約30年
- ・ 戦争前の職業：戦前から1頭の乳牛を飼養しながら、自給野菜を栽培していた。戦時中

はゴラジュデ近郊に非難 1996 年に帰還。

- ・ 飼養状況：搾乳牛 1 頭、ボスニア牛で日中は放牧。牛体高 135cm。獣医に定期的に血液検査してもらっているので病気はない。牛糞はすべて畑に還元している。牛床はスコップで時折掃除するのみ。
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 飼料の種類と給与方法：野乾草（15kg）をメインに、朝・夕搾乳前にりんご、飼料用かぼちゃ、かぶ、家畜ビート等に配合飼料を混入したものをなべで煮て与える。飼料の量はとくに測ったことはないので分からない。バケツ給水式。どぶ飼い。
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝 7 時、夕方 6 時搾乳 8 リットル。手絞り。
- ・ 販売先：自家消費
- ・ 作業分担：夫が牧草刈り取りと乾草づくり。妻が牛管理
- ・ 組合との関わり：アグロポドリナ組合に入っている。
- ・ 現在の問題：耕運機があれば作業が楽になる。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 将来：子どもにも酪農をやってもらいたいが現状では無理。

訪問先：ブルーベリー栽培農家 プラトナツ ボレッチ地区

日時：11 月 5 日（金）11：15

対応者：グラデッチさん

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：150 戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：44 歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻 37 歳・長男 6 歳
- ・ 土地面積：2ha
- ・ 当地在住期間：約 44 年
- ・ 戦争前の職業：戦前は車の運転手。戦時中もここに留まっていた。
- ・ 栽培作物の種類：ブルーベリーとトウモロコシ
- ・ 栽培面積：ブルーベリー（2ha） トウモロコシ（0.5ha）
- ・ 施肥：堆肥を中心に行っているが、育苗の時期に窒素肥料を散布
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 作付け体系：4 月・5 月植え付け 7 月・8 月収穫 10 月・11 月は苗床準備。
- ・ 種子の入手：サラエボ近郊にある種子販売店で入手。保証苗を使うわけではない。

- ・ 収穫量：1000kg（2004年の実績）
- ・ 作業時間：6時から5時 収穫時期は4時起床
- ・ 販売先：約2km先のスウェーデン系列の食品会社に自分のトラックで運ぶ。
- ・ 販売価格：2003年は2KM/kg、2004年は1.35KM/kg
- ・ 病虫害防除：農薬散布は販売先の会社が処方箋を提供するのでそれにしている。
- ・ 組合との関わり：特になし。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。栽培の基礎から学びたい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 将来：こどもにもベリー栽培をやってもらいたい。
- ・ 収入の程度：家族が生活するには十分である。
- ・ 現在の問題：
 - ① 作業上の問題としては、耕運機があれば仕事が楽になる。
 - ② 栽培技術の未熟さを痛感する。例えば、
 - a 施肥はとくに基準を定めている訳ではなく推定量で実行している。買い取り業者の食品会社が土壌検査を行うが、その費用は90ユーロになる。その分析結果が施肥基準に生かされているとは思えない。
 - b 買い取り業者から指示されている農薬はずいぶん前から同じ薬である。そのため、最近効き目が悪くなっている。2003年、友人の畑で病気が発生してベリーがほぼ全滅になった。他にどの薬が有効なのか判断できないことが問題である。
 - c 農繁期には、戦前公共農場でベリー栽培に従事していた人を雇うが、施肥業務のような応用技術の必要な作業は専門家が行っていたため、普通の労働者は基礎的な技術は全く指導されていない。したがって、現在ベリー栽培をやっている人は、見よう見まねでやっている状態である。
 - d 種子の購入に関しても、品質を見分ける方法が分からないので粗悪品を買わされることもたびたびである。UNDPの関係業者から種子を買ったある農家は、種子が病気汚染されていることに気がつかず播種したため全滅したこともある。
 - ③ 生産農家の組合のようなものがなくては将来的に不安である。
 - a 現在の我々は、すべての面で買い取り業者の言うがままである。収穫物を搬入した際、計量に立ち会うことが無いこともあり信用できない。
 - b 販売代金の支払いは週ごとに払われることになっているがそれが守られていないことが多い。
 - c ベリーの販売価格は、1級（1.70KM/kg）2級（1.30KM/kg）3級（1.10KM/kg）の3クラスに分けられる。買い取り業者からの納品期限条件は正午とされている。この条件は、距離的に近距離の農家は問題がないが、20km以上離れている農家には厳しいことになる。箱に積んだベリーは山道を経て出荷されるため、倉庫に到着した時点で品物に損傷が激しく、もともと1級のものでも3級に落とされる。

このように、さまざまな不利益を被っているが、業者にクレームをつけても個人対企業という形になるので結果的には弱い立場になる。早急に生産者組合のようなものの立ち上げが必要である。

訪問先：ストロベリー栽培農家 スレブレニツァ オッサンスクール地区

日時：11月5日（金）13：20

対応者：コスホゲイラさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：30戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。戦前はたばこ栽培で有名だった。
- ・ 戸主年齢：27歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻27歳・父親59歳・母親56歳・長男6歳
- ・ 土地面積：5ha
- ・ 当地在住期間：戦時中はトウズラに非難していたが2002年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：戦前からストロベリーの栽培。
- ・ 栽培作物の種類：ブルーベリー栽培（帰還後最初の試み）
- ・ 栽培面積：0.2ha 2,500本植え付け
- ・ 施肥：堆肥を中心に行っているが、育苗の時期に窒素肥料を散布
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 作付け体系：8月植え付け 5月収穫
- ・ 種苗の入手：知り合いの業者から購入。2,500本を150KMで購入。
- ・ 収穫量：以前と同量の収穫が見込めれば、2,000トン
- ・ 作業時間：6時から5時
- ・ 販売先：まだ決まっていない。
- ・ 販売価格：未定
- ・ 病虫害防除：農薬散布は戦前のやり方で対応する。
- ・ 組合との関わり：特になし。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。栽培の基礎から学びたい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 収入の程度：未定
- ・ 現在の問題：一日も早く安定した収入が欲しい。戦死した兄の年金が300KM入ってくるがそれも不定期である。

訪問先：羊飼養農家 スレブレニツァ セルニャダ地区

日時：11月5日（金）14：15

対応者：ユスホゴエラさん（女性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：12戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：55歳
- ・ 学歴：小学校卒
- ・ 家族：夫は戦時中に行方不明。身内は4名戦死した。
- ・ 土地面積：10ha
- ・ 当地在住期間：2002年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：運転手。戦前は夫が車を個人所有していた。
- ・ 飼養状況：羊12頭
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 飼料の種類と給与方法：通年放牧しており、とくに餌は与えない。
- ・ 現在の問題：現在はお金の必要な時に羊を売却して生活している。安定した収入の得られる道が欲しい。
- ・ 将来：時々不安になる。

訪問先：酪農家 スレブレニツァ セルニャダ地区

日時：11月5日（金）15：20

対応者：ユスナビッチさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：12戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：49歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻42歳・長男25歳（農業高校出身）・長女16歳・二女13歳
- ・ 土地面積：5ha
- ・ 当地在住期間：戦時中はゼニツァ地区に非難。2002年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：戦前は羊を飼っていた。
- ・ 飼養状況：搾乳牛2頭（ボスニア牛）雄牛2頭、乾乳牛2頭。日中は放牧。牛体高136cm、牛糞はすべて畑に還元している。牛床には敷き藁がしてある。
- ・ 繁殖：自然交配 獣医に人工授精を依頼したことがあるが料金が高い上に妊娠しないのでやめた。

- ・ 作業用機械：なし
- ・ 飼料の種類と給与方法：野乾草（15kg）をメインに、朝・夕搾乳中に粉末トウモロコシ飼料を給与（約 2kg）どぶ飼い
- ・ 配合飼料価格：10KM/50kg
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝 7 時、夕方 5 時搾乳 平均 15 リットル。手絞り。
- ・ 販売先：自家消費
- ・ 作業分担：夫が戦争の後遺症で足が不自由なため、ほとんど妻が牛管理をしている。
- ・ 組合との関わり：なし。
- ・ 現在の問題：牛乳の販売先がない。現在はチーズを作って販売。
- ・ ワークショップに関する関心：ぜひ参加したい。時期は冬の間が望ましい。
- ・ 将来：こどもにも酪農をやってもらいたい。

訪問先：羊農家 スレブレニツァ オスマーフア地区

日時：11 月 6 日（土）12：20

対応者：デディーチュアレンさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：40 戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：46 歳
- ・ 学歴：小学校卒
- ・ 家族：妻 44 歳・長男 21 歳(学生)
- ・ 土地面積：0.15ha
- ・ 当地在住期間：2000 年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：戦前は林業が主。
- ・ 飼養状況：羊 36 頭
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 飼料の種類と給与方法：通年放牧。
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝 7 時、夕方 5 時搾乳 総乳量は平均 15 リットル。
- ・ 販売先：自家消費 チーズも作る。
- ・ 組合との関わり：なし。以前交流はあったが、搾取されることの方が多くやめた。
- ・ 現在の問題：オランダの NGO レッド・レックスからチーズの作り方の講習を受けたが販売先がない。

訪問先：酪農・羊農家家 スレブレニツァ ポドラマ地区

日時：11月6日（土）13：20

対応者：ユスナビッチさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：50戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：59歳
- ・ 学歴：小学校卒
- ・ 家族：妻55歳・長男30歳・長男妻（26歳）
- ・ 土地面積：0.15ha
- ・ 当地在住期間：1998年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：戦前は林業が主。
- ・ 飼養状況：搾乳牛2頭、羊100頭
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 飼料の種類と給与方法：通年放牧。塩以外にはとくに給与せず。
- ・ 搾乳時間と平均乳量：朝7時、夕方5時搾乳 平均8リットル。手絞り。
- ・ 販売先：自家消費 チーズも作る。
- ・ 組合との関わり：なし。
- ・ 現在の問題：羊の利用法が分からない。今のところは、お金の必要な時に適当に売却している。

訪問先：ストロベリー栽培農家 プラトナッツ レジナ地区

日時：11月6日（土）14：00

対応者：サフィットさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：40戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。
- ・ 戸主年齢：50歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻46歳・長女13歳・二女9歳
- ・ 当地在住期間：戦時中はジズビニッチャに非難していたが2001年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：会社で総務部勤務
- ・ 栽培作物の種類：ストロベリー栽培（帰還後最初の試み）
- ・ 栽培面積：0.5ha
- ・ 施肥：育苗の時期に窒素肥料を散布

- ・ 作業用機械：なし
- ・ 作付け体系：8月植え付け 5月収穫予定
- ・ 種苗の入手：ローカルNGO (F.W.A) から、肥料、資器材、技術サポートにいたるまですべて提供された。技術者は毎週巡回指導に来る。
- ・ 収穫量：未定
- ・ 販売先：まだ決まっていない。NGO からはブルーベリーの販売先の話はあったが、ストロベリーについての販売先は未定とのこと。
- ・ 販売価格：未定
- ・ 病虫害防除：NGO の技術者の支持に従う。
- ・ 組合との関わり：特になし。
- ・ 将来：ストロベリーで安定収入が得られたら良い。
- ・ 収入の程度：未定
- ・ 現在の問題：一日も早く安定した収入が欲しい。

訪問先：ブルーベリー栽培農家 プラトナッツ レポーズ地区

日時：11月6日(土) 14:40

対応者：ダルグミン ハグイッチさん(男性)

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：100戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。
- ・ 戸主年齢：34歳
- ・ 学歴：高等学校卒
- ・ 家族：妻33歳・長男12歳・二男1歳
- ・ 当地在住期間：戦時中も避難せず
- ・ 戦争前の職業：ブルーベリー栽培 1985年から栽培している。
- ・ 栽培作物の種類：ブルーベリー栽培
- ・ 栽培面積：3ha
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 種苗の入手：自分で信用のおける業者から購入
- ・ 収穫量：1,300kg (2004年)
- ・ 作業時間：収穫時は早朝5時から
- ・ 販売先：PR-KOMEPU社 Tel: 056-885-648/881-071
- ・ 販売価格：2KM/kg
- ・ 組合との関わり：特になし。信用できないし、マイクロクレジットも好まない。
- ・ 新規参入者へのアドバイス：決して甘い仕事ではない。収穫時期を一日でも逃せば価値

が激減する。たいていの業者は 12 時までには搬入することになっているので、その時間に間に合わせることも容易ではない。

訪問先：ストロベリー栽培農家 ブラトナツ レジナ地区
日時：11月6日（土）15：10
対応者：クルティス シクレットさん（男性）
調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：40戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。
- ・ 戸主年齢：29歳
- ・ 学歴：小学校卒（戦争のため途中でやめざるを得なかった）
- ・ 家族：妻 25歳・長男 8歳
- ・ 当地在住期間：戦時中はサラエボに非難していたが 2002年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：アルバイト
- ・ 栽培作物の種類：ストロベリー栽培（帰還後最初の試み）
- ・ 栽培面積：0.5ha
- ・ 施肥：育苗の時期に窒素肥料を散布
- ・ 作業用機械：耕運機一台 MHRR より供与された。
- ・ 作付け体系：8月植え付け 5月収穫予定
- ・ 種苗の入手：ローカル NGO (F.W.A) から、肥料、資器材、技術サポートにいたるまですべて提供された。技術者は毎週巡回指導に来る。
- ・ 収穫量：未定
- ・ 販売先：まだ決まっていない。NGO からはブルーベリーの販売先の話はあったが、ストロベリーについての販売先は未定とのこと。
- ・ 販売価格：未定
- ・ 病虫害防除：NGO の技術者の支持に従う。
- ・ 組合との関わり：特になし。
- ・ 将来：ストロベリーで安定収入が得られたら良い。
- ・ 収入の程度：未定
- ・ 現在の問題：一日も早く安定した収入が欲しい。

訪問先：ストロベリー栽培農家 プラトナツ レジナ地区

日時：11月6日（土）15：40

対応者：ハサナ イブリマンさん（女性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：40戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど
- ・ 戸主年齢：29歳
- ・ 学歴：高等学校卒 夫とは離婚
- ・ 家族：長女8歳
- ・ 当地在住期間：戦時中はサラエボに非難していたが2002年に帰還。
- ・ 戦争前の職業：学生
- ・ 栽培作物の種類：ストロベリー栽培（帰還後最初の試み）
- ・ 栽培面積：0.04ha
- ・ 施肥：育苗の時期に窒素肥料を散布
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 作付け体系：8月植え付け 5月収穫予定
- ・ 種苗の入手：ローカル NGO(F.WA)から、肥料、資器材、技術サポートにいたるまですべて提供された。技術者は毎週巡回指導に来る。
- ・ 収穫量：未定
- ・ 販売先：まだ決まっていない。NGO からはブルーベリーの販売先の話はあったが、ストロベリーについての販売先は未定とのこと。
- ・ 販売価格：未定
- ・ 病虫害防除：NGOの技術者の支持に従う。
- ・ 組合との関わり：特になし。
- ・ 将来：ストロベリーで安定収入が得られたら良い。
- ・ 収入の程度：未定
- ・ 現在の問題：一日も早く安定した収入が欲しい。

訪問先：ハーブ栽培農家 スレブレニツァ ゴニポトチャ地区

日時：11月8日（月）10：15

対応者：エフェンディツタさん（男性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：50戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。
- ・ 戸主年齢：31歳

- ・ 学歴：高等学校卒 独身
- ・ 家族：父親 65 歳・母親 54 歳
- ・ 当地在住期間：戦時中はトゥズラに避難していたが 2001 年に帰還した。
- ・ 戦争前の職業：父親はトラックの運転手をしながら農業（じゃがいも・小麦等）をしていた。
- ・ 所有土地面積：5ha
- ・ 栽培作物の種類：ハーブ栽培 Neven 種（肌クリーム等に使う）
- ・ 栽培面積：0.4ha
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 体系作付け：5 月 20 日ごろ播種（本来は 4 月中がベスト）10 月 8 日から収穫
- ・ 種苗の入手：USAID を経由して無償供与。サラエボ大学農学部の Dr.Tanum が技術指導担当。播種前に土壌検査等を行った結果、当地はハーブ栽培には最適と判断された。小麦の栽培適地は概ねハーブにも適している。
- ・ 収穫量：450kg
- ・ 販売先：販売契約を結んであるが連絡がとれない
- ・ 販売価格：25 KM/kg（予定）
- ・ 組合との関わり：とくになし。信用できないし、マイクロクレジットも好まない。
- ・ 問題点：
 - ・ 2003 年は特に何もしなかったが、2004 年は USAID の誘いもあってハーブ栽培を始めた。サラエボ大学の教員が技術指導に来てくれていたが、ハーブは小麦栽培と類似しているためとくに技術的に困ったということはない。種・農薬・肥料・農機具貸借代等必要経費はすべて USAID が負担してくれた。しかし、収穫を終えて販売の段取りも整ったところで販売契約を結んでいた業者に連絡したところ、多忙を理由に話が全く進展しなくなった。USAID にも対応を依頼しているがまだ解決していない。
 - ・ 耕運機等の農機具の貸借代は USAID が負担してくれているが、（農家が地元のコミュニティから借り受け、その代金を USAID が払うしくみ）刈り取り適期を逃さないためにも自分の物が欲しい。
 - ・ ハーブの栽培農家で、生産者組合のようなもの設立したい。そうすれば買い取り業者にも圧力がかかり、生産者も少しは強くなる。
 - ・ 若い生産者がいない。これでは将来に希望が持てない。

訪問先：ハーブ栽培農家 スレブレニツァ ベチスタ地区

日時：11月8日（月）11：15

対応者：ダリッチさん（女性）

調査団：中谷

- ・ 調査地域全個数：50戸
- ・ 地域住民の職業割合：農業がほとんど。
- ・ 戸主年齢：57歳
- ・ 学歴：小学校卒 夫はサラエボで行方不明。
- ・ 家族：長男
- ・ 当地在住期間：2001年に帰還した。
- ・ 戦争前の職業：夫はこの町にあった工場に勤めていた。
- ・ 所有土地面積：1ha
- ・ 栽培作物の種類：ハーブ栽培 HeLja 種（乾燥した花をまくらに入れる）
- ・ 栽培面積：0.1ha
- ・ 作業用機械：なし
- ・ 体系作付け：5月播種、7月から収穫
- ・ 種苗の入手：USAID を経由して無償供与。サラエボ大学農学部の Dr.Tanum が技術指導担当。播種前に土壌検査を行った結果当地はハーブ栽培には最適と判断された。小麦の栽培適地は概ね良い。
- ・ 収穫量：20kg
- ・ 販売先：販売契約を結んであるが連絡がとれない。
- ・ 販売価格：8 KM/kg（予定）
- ・ 組合との関わり：特になし。信用できないし、マイクロクレジットも好まない。
- ・ 問題点：
 - ・ 2003年は特に何もしなかったが、2004年はUSAIDの誘いもあってハーブ栽培を始めた。サラエボ大学の教員が技術指導に来てくれていたが、ハーブは小麦栽培と類似しているため技術的に困ることはなかった。種・農機具貸借代等必要経費はすべてUSAIDが負担してくれた。しかし、収穫を終えて販売の段取りも整ったところで販売契約を結んでいた業者に連絡したところ、多忙を理由に話が全く進展しなくなった。USAIDにも対応を依頼しているがまだ解決していない。
 - ・ 耕運機等の農機具の貸借代はUSAIDが負担（農家が地元のミュニシパリティから借り受け、その代金をUSAIDが払う）自分の機械があれば仕事ははかどる（特にHeLja種は、花の摘み取り時期が正午から2時くらいまでに限られるため）。
 - ・ ハーブの栽培農家で、生産者組合のようなもの設立したい。そうすれば買い取り業者にも圧力がかかり、生産者も少しは強くなる。
 - ・ 計量器がないから、生産物の目方はすべて業者の言いなりである。

平成 16 年 11 月 30 日

西バルカン人間の安全保障プロ形打ち合わせ
議事録

日時：平成 16 年 11 月 30 日(火) 11:00-12:30

場所：JICA 本部 13 階 13C 会議室

出席者

調査団員：JICA 橋本専門員(団長)、UNHCR 山本氏、荒木職員、本郷 Jr. 専門員、七海職員、IDGJ

渡辺氏、アイ・シー・ネット中谷氏

企画・調整部 平和構築支援室 戸田室長/ 田和チーム長

農村開発部 乾燥畑作地帯第一チーム 佐藤チーム長

中東・欧州部 中川部長 / 小池中東第二・欧州チーム長 / 泉谷特別囑託(記録)

理事長室 篠原秘書役

討議内容

配布したレジュメに沿って、橋本団長が現段階での草案を説明。農業支援部分については別資料により、農村開発部の荒木職員から説明があった。橋本団長から、スケラニを候補サイトとして選択した理由に関して、具体的な活動を一刻も早く動かす必要があることから第一段階のサイトに求められる、協力をしやすい環境、規模等といった条件がスケラニに整っていること、また、スレブレニツァの中心から遠く、支援が行き届かないこともあり、経済水準が低く、ニーズも高いことが説明された。以下、質疑応答に沿って箇条書きにする。

1) 農業支援による和解への効果が不明確ではないか？より根本的には、和解それ自体を目的とすることは適切か？(中川部長)

実施の際の参加者の配分で対応することになると考える。(荒木職員) 当該社会は多民族で構成されており、共同で計画・活動を行うこと自体が融和の促進に繋がる。(橋本専門員)

2) 走りながら次の方向性を考える形式で実施することだが、実施の中で生じる様々な課題を取り込めるような柔軟な構造をこのプロジェクトは持っているのか？JICA にとって初めての分野の案件であり、事前に全てを内包した計画は立て難く、その時々状況に柔軟に対応できる体制で臨む必要がある。他地域にも適応しうるモデルを、当案件を通して作り上げていくことになる。また、遅れて当地に入る JICA としては、他ドナーのこれまでの経験を生かすことが可能かつ必須。(中川部長・戸田室長)

草案は二つの柱で構成されているが、第一の人権・難民省に派遣される専門家は BiH 全体への波及効果を責務として負う。また第二の農業支援による地域振興は、農業のスキルの向上のみでなく、対象地域の包括的な発展を目的とするものである。(橋本専門員)

3) NGO と地域行政という参加者が想定されているが、二者間の関係は良好か？(戸田室長)

問題はないと認識している。帰還委員会(リターン・コミッション)はミニシパリティに設置され、ドナーからの支援の配分も受け持っており、NGO サイドからの参加もある。この点から判断しても、関係は良好と言えよう。(橋本専門員) また MZ 内には NGO との協力を受け持つ担当があり、(渡辺氏) スケラニの NGO 事務所は MZ と同じ建物内にあった。(本郷ジュニア専門員)

4) 技術移転先がサラエボ大学であり、対象地域社会それ自体とはなっていない。日本人専門家が対象地域となるスケラニに常駐しないのでは、効果がわかりにくくなるのではないか？今後の方向性を策定する為の情報収集の観点からも、現地での活動に重点を置くべきであろう。(中川部長)

現段階では、専門家の配置先を判断するに足る情報が無い。第一フェーズでの短期専門家から情報を得て、第二フェーズでの長期専門家の ToR 及び常駐先を決定したい。(佐藤チーム長)

追加情報としてサラエボ大学農学部状況に関して

サラエボ大学農学部は、当地における農業関連の技術普及の要となっているが、予算の問題もあり、現場には大学の休暇期間中に USAID 等ドナーの経費負担で入る程度であり、現場に常駐はしていない。また講師陣は農業専門家のみで、地域開発等の専門家はいない。(荒木職員)

想定されている計画では現場との距離がある。ワークショップ開催等の方法では知識しか現場に残らない。農業支援より、住民の組織化が先ではないか？現場を優先し、コミュニティー開発が進んだところで農業の各プロジェクトが効果を発揮するというのが順番と考える。(渡辺氏)

5) 住民組織化には往々にして地方行政の無理解が障害となる場合があるが、当地では問題ないのか？(戸田室長)

当地に限らず BiH の地方行政システムは複雑すぎ、協力を前提とした計画は無理がある。しかしながら各種認可の権限はミニシパリティにあり、友好的関係作りは必須といえよう。(渡辺氏) 当地のミニシパリティは無視出来ないが、頼れない存在。対象地域の住人、少数派住民は組織化されておらず、彼らをミニシパリティとの交渉の主体として育成していく必要がある。(山本氏)

6) 初期段階で住民組織化と農業計画立案、二名の短期専門家を投入することは可能か？(橋本専門員)

現時点では想定していなかった。難しいが検討する。(荒木職員)

7) 当案件は二つの柱により構成されると考える。一つは JICA にも蓄積のあるコミュニティ・エンパワメントであり、もう一つは少数民族保護から発生が予想される多数派との軋轢を調整するプロテクションである。JICA にはプロテクションのノウハウは無いが、将来的に必ず直面する問題であり対応を考えておく必要がある。注意すべき点は、当社会は崩壊したと言いつつも発展した社会制度が残存しており、アフリカの例と比較すると、一度投入した案件の修正が難しいということである。ここ一年の当案件の進展が当地における JICA の評価、認識に繋がることを意識しつつ、注意深い計画、実施が必要となろう。(渡辺氏)

プロテクションの部分は JICA には対応が難しく、そうした問題は今後の推移の中で「走りながら」対応していくほかないのではないか。(中川部長) 勿論、対象地域のタブーを理解し、調整しうる要員が不可欠ではあるが、それは UNHCR 等の国際機関との協力により運営していくことが重要となるだろう。(戸田室長) 日本人がこうした繊細な状況に関与するのは、一般的には経験が少ない為、難しいと言えるが、日本人だからこそ中立交りうるという期待が現地にはある。(橋本専門員) 現地スタッフによる調整も、採用の際の困難はあるが、選択肢の一つであろう。(中川部長)¹

8) 当案件は少数派のみを対象とするのか？(戸田室長)

両方を対象とし、双方が参加しうる手段としての農業支援と位置づけている。(橋本専門員)

9) これまでの各国の支援の成果を分析し、それに学びつつ計画を立てる必要がある。(戸田室長)

それはその通りであり、情報収集と分析が必要である。(橋本専門員)

¹ 筆者注 この点に関して、渡辺氏より以下の人材が、こうした状況に対応可能な人材として紹介された
Mustafa: 以前、日本の NGO の JEN に 8 年もいたローカルスタッフ。通訳兼コーディネーターに最適。レポート書きは苦手。契約期間により異なるが、私どもは残業代込みで 1 日 50Euro (ゴラジュデ以外は宿代はこちら持ちで、日当 20Euro) で雇用。携帯電話: 061 272 214 メールアドレス: mustafakadic@yahoo.com
Dr. Milenk N. Blesic Docent: サラエボ大学の先生。ワインの専門家であるが、農業一般にも詳しく。資料収集に誠実に
対応してくれた。メールアドレス: anditija@bih.net.ba

10) スケラニだけを対象としているのか?本案件は JICA に取り初めての試みであり、BiH 全体に波及しうるモデルとしてのシステム作りを望む。(中川部長) JICA としてはバルカン全体を視野に入れた事業をイメージしており、他地域への普及を考慮した対応が望まれる。(篠原秘書役)

勿論、そうした視野も含めての活動であるべきであり、実施を通して情報収集し、柔軟に対応していく必要がある。(橋本専門員) この地域は、そうした意味において、様々の可能性を含んだ地域であることを強調したい。(中谷氏)

以上

収集資料リスト

	タイトル	作成日	作成者	入手元
1	PROFILE FOR GORAZDE MUNICIPALITY, BOSNIA AND HERZEGOVINA (BiH)	2004年10月	UNHCR BiH	UNHCR
2	Statistical Summary as at 31 August 2004	2004/8/31	UNHCR BiH	UNHCR
3	STATISTICS PACKAGE 31 August 2004	2004/8/31	UNHCR BiH	UNHCR
4	STATISTICS: IMPLEMENTATION OF THE PROPERTY LAWS IN BOSNIA AND	2004/7/31	UNHCR OHR OSCE	UNHCR
5	ESTIMATE OF REFUGEES AND DISPLACED PERSONS still seeking solutions in South-Eastern Europe	2004/8/1	UNHCR	UNHCR
6	UNHCR Global Appeal 2004 Bosnia and		UNHCR	UNHCR
7	A STRATEGY OF BOSNIA AND HERZEGOVINA FOR THE IMPLEMENTATION OF ANNEX VII	2003年12月	MINISTRY FOR HUMAN RIGHTS AND REFUGEES	UNHCR
8	The General Framework Agreement:Annex 7	1995/12/14	OHR	UNHCR
9	National Government of Bosnia and Herzegovina Political Structure	2003/2/21	SFOR	UNHCR
10	CONSOLIDATED REPORT OF THE MUNICIPALITY ASSESSMENTS IN BOSNIA AND HERZEGOVINA: RIGHTS-BASED MUNICIPAL ASSESSMENT AND PLANNING PROJECT	2004年4月	UNDP	UNDP
11	ODZAK MUNICIPALITY RIGHTS-BASED DEVELOPMENT STRATEGY 2005-2009 (Draft)	2004年8月	UNDP	UNDP
12	Rights-based Municipal Development Strategy: Municipality of Zvornik		UNDP	UNDP
13	Rights-based Municipal Development Strategy: Municipality of Stolac		UNDP	UNDP
14	BEKTO(企業PRパンフレット)		BEKTO	BEKTO
15	Leaflet:Agricultural project in the regions of Gorazde and Birac, Bosnia and Herzegovina, Program 2004-2009		CARITAS	CARITAS
16	PROFILE FOR SREBRENICA MUNICIPALITY, BOSNIA AND HERZEGOVINA (BiH)	2004/10/20	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
17	PROFILE FOR BRATUNAC MUNICIPALITY, BOSNIA AND HERZEGOVINA	2004/10/20	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
18	PROFILE FOR VLASENICA MUNICIPALITY, BOSNIA AND HERZEGOVINA	2004/10/20	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
19	PROFILE FOR MILICI MUNICIPALITY, BOSNIA AND HERZEGOVINA	2004/10/20	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
20	PROPOSED PRIORITY AREAS FOR POSSIBLE INFRASTRUCTURE REPAIRS BY USAID	2004年9月	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
21	UNHCR SONBiH - 2005 Demining priorities as related to the return process	2004/10/14	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
22	AGRICULTURAL COMPANIES, FARMERS' COOPERATIVES AND CITIZENS' ASSOCIATIONS INVOLVED IN FARMING PROJECTS IN THE EASTERN REPUBLIKA	2004年10月	UNHCR Sub Office for Northern BiH, Tuzla	UNHCR
23	Destination Europe EU-RED Northeast Economic Region (website printouts)	2004年8月	European Union Regional Economic Development	UNHCR
24	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers (website printouts)		USAID Bosnia & Herzegovina	UNHCR
25	Investing in Basics in Europe's War Zone (from the wall street journal)	2004/9/16	Beth Kampschr (special to the wall street journal)	UNHCR
26	Survey on Displaced Persons in Tuzla Canton from the Podrinje Area, Eastern Republika Srpska	2003年6月	UNHCR	UNHCR
27	SREBRENICA DANAS-SUTRA (in Bosniac)		DANAS SUTRA	DANAS SUTRA
28	Vasa Prava Legal Aid Network in 2004	2004年5月	VASA PRAVA	VASA PRAVA
29	VASA PRAVA Magazine (in Bosniac)	2004年10月	VASA PRAVA	VASA PRAVA
30	Annual Report 2003		Partner	Partner
31	Citizens association for local development initiative Basic economic survey of Bratunac municipality and srebrenica	2003年6月	Care International	Univ. of Salajevo

32	A-medium term agriculture sector strategy for the Federation of Bosnia and Herzegovina	1999年8月	FAO	Univ. of Salajevo
33	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Berries May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
34	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Seep May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
35	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Meat May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
36	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Dairy product May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
37	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Poultry May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
38	LAMP:Linking Agricultural Markets to Producers, Pig May 2004	2004年5月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
39	Slaughtered Livestoch in Slaughter house	2004年11月	Ministry of Agriculture, Forestry and Water	Dr.Milenco
40	Agricultural Coorporative " Agropodorina "in	2004年10月	Agropodorina	Director
41	Agricultural Coorporative " Agrodorina " in Gorazde	2004年10月	Agrodorina	Director
42	Intervi Report of Authority/Institution/Organization 2004	2004年10月		
43	Milk production in BiH	2004年11月	Ministry of Agriculture, Forestry and Water	Dr.Milenco
44	USDA Gain Report, Fresh Decidupus Fruit Raspberries Annual 2003	2003年6月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
45	(Statistical Bulletin) Agency for Statistics of Bosnia and Herzgovina	2004年	Ministry of Agriculture, Forestry and Water	Dr.Milenco
46	Gloval Development Alliance Concept for Berry production in Srebrenica/Bratunac Region	2004年		
47	Demand Analysis/Inventory/Report Fruit and Vegetable: Frozen Raspberries Jan.2004	2004年1月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
48	Strategec plan of Economic Development of Srebrenica	2004年10月		
49	Information of Agriculture in Srebrenica	2004年10月		
50	Demand Analysis/Inventory/Report Fresh Fruit Jan.2004	2004年1月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
51	Demand Analysis/Inventory/Report Fresh Vegitable Jan.2004	2004年1月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
52	Demand Analysis/Inventory/Report Oil seed Jan.2004	2004年1月	USAID Bosnia & Herzegovina	USAID
53	A-medium term agriculture sector strategy for Republica srepska	1999年8月	FAO	Univ. of Salajevo
54	The Lutheran World Federation Department for World Service	2004年4月	The Lutheran World Federation	The Lutheran World Federation

西バルカン諸国における「人間の安全保障」プロジェクト（案）
（西バルカン調査報告概要）

中東・欧州部（中川）

1. 基本的な考え方

西バルカン諸国は、総じて復興段階を脱し経済開発の段階にあるものの、経済レベルの低さ、高い失業率と貧困率は当該社会の安定にとって大きな課題となっている。依然 100 万人を超えると言われる難民、避難民は、貧困層の大部分を占めており、これら人々の経済的自立を図っていくことが、将来にわたるバルカン諸国の平和と安定にとって極めて重要である。従って、人間の安全保障を JICA 事業に具体化するにあたっては、帰還民、避難民を包含したコミュニティの生計向上を基本コンセプトに、民族和解と地域社会への統合プロセスを支援し、持続的な開発への道筋をつけるものとする。

2. ボスニア・ヘルツェゴビナ

デイトン合意以降 9 年を経て、戦争の傷跡は一部に残っているものの都市部の復興は著しい。他方、多くの工場が閉鎖あるいは縮小したままであり雇用の吸収力にはなっていない。農村部は小規模な果樹や野菜の栽培、酪農が主な収入源である。同国の PRSP においても人口の 2 割は絶対的貧困（さらに 3 割が貧困ライン）にあり、そのほとんどが帰還民や IDP（現在でも 32 万人）とされている。難民、IDP の帰還は 96 年以降、毎年数万人規模で行われ、規模は減少しつつも現在も続いている。これらの人々に対しては、国際機関や多国間協力の枠組みのなかで、住居建設、道路、電気等のインフラ整備や自活に向けたマイクロクレジットの供与等が行われているものの充足していないのが現状。特に、2001 年に至ってやっとマイノリティの帰還が始まったが、デイトン合意直後のような支援が行われていない。



今次調査においては、モスタル、ゴラジュデ、プラトナツツ、スレブレニツァ周辺の村落において、UNHCR を始め UNDP、NGO 等の援助関係者や市長、住民代表者等との意見交換を行った。共通的なニーズとして挙げられたのは、インフラとともに帰還民世帯の収入源となる山間地での農業、酪農生産の向上と市場へのアクセスである。具体的には果樹（ブルーベリー、プラム、リンゴ、イチゴ）やキノコ、ハーブ、有機栽培野菜、養蜂、牛乳生産、食品加工である。特に牛乳は現金収入に直結するものとして、NGO やドナーの協力で数多く行われており、農家が市場にアクセスするための保冷施設、回収システム等の協力が行われている。（JICA でも開発調査のパイロットプロジェクトの一つとして実施している）

訪問した3地域の概要と想定し得る「人間の安全保障案件」は以下の通り。

●ゴラジュデ

町の中心部を除けば周辺の山間地に数戸づつの集落が点在している。帰還民支援としてわが国 NGO の JEN がエンティティを跨いで牛乳を市場に出す援助を行っているが本年中に終了予定。UNHCR もマイクロクレジットや小規模インフラ等の支援を行っているが同地のフィールド事務所を近々閉鎖予定。山間地の帰還民を始めとして経済的自立に向けた開発ニーズは大きい。同地には 10 の Municipality からなる Regional Board (ボスニアックとセルブの 5 : 5 で構成) が組織されており、コミュニティ開発における受け皿（調整役）となろう。



●プラトナツツ

プラトナツツ市長及び市帰還委員会からは、もともと失業者が特に多く開発の遅れた地域であることに加え、2000人以上の帰還の申し入れがあるものの、住居を始めインフラが整っていない現状から、住宅再建、農道整備とともに農業（ベリー類の栽培）、酪農への支援を求める声が強かった。同地の学校を改造したコレクティブセンターには多くの帰還民が集団生活しており、周辺の山あいにはテント生活者が見られた。これらの多くは高齢者である。既存のコミュニティセンターを拠点に、これらの人々を含めた自活の糧となるような農業分野

での協力が考えられる。



●スレブレニツァ

ジェノサイドの地となったこともあって、ボスニアのなかでは帰還が最も遅れ、2000年から始まっている。従って、戦前に比してボスニアックの8%（約2500人）が帰還したに過ぎないと言われており、今後の開発ニーズの大きい地域の一つである。同地を含めてUSAIDは主としてインフラ（アクセス道路や電気など）への協力を行っており、UNDPはインフラ、水供給、林業、地雷除去、教育、女性企業家等の幅広い分野への支援を行っている（日本を含む各国拠出金事業）。なお、わが国の草の根無償（コンピュータほか）の供与先ともなっているSrebrenica Business Centre（NPO）は、小規模起業化に向けた教育、訓練、マーケティング等の支援を行っており、わが方協力内容によってはパートナーとなり得る団体である。



以上の点を踏まえた「人間の安全保障プロジェクト案」は以下のとおり。

(山間地農業を基本とするコミュニティ開発プロジェクト案)

帰還民を含む地域住民の生計向上を支援するため、有機野菜や果樹栽培のための優良種子の配布、小規模灌漑、ハンドトラクター等による農業機械化、及びマーケティングを含めた技術指導を共同組合を通じて行う。また、プロジェクトの持続性を確保し地方分権を支援する意味でも、事業のプロセスにムニシパリティの主体性を引き出し、将来的には彼らが計画、運営できるような能力開発をあわせて行う。複数の民族がプロジェクトに含まれることから、実施過程を通じて和解促進を図るとともにワークショップ等を開催する。なお、カウンターパートはムニシパリティとし、NGOと連携して実施する。

3. セルビア・モンテネグロ

長年の経済制裁と旧ユーゴ紛争により産業基盤、設備等が老朽化し経済が疲弊しているのが見て取れる状況である。JICAが協力を開始したのも2001年に至って援助が再開されてからであり、経済再建を重点に取り組んでいる。旧ユーゴ紛争により556千人のボスニア、クロアチア居住者が行き場を失い、現在でも28万人がセルビアに留まっている。また、同国はコソボからのIDP245千人を抱えていると報告されており、帰還の目処がないこれらの人々を如何に社会に統合していくのかが大きな課題である。セルビア政府(対外経済関係省)は、PRSPにおいても難民、避難民を最も重大な問題の一つと位置付けており、これらの人々を含め開発のためのボトムアップのアプローチをプロポーザルに纏めたいとしている。

●中部セルビア

調査団が訪問したクライエヴォにおいて、市当局や地域社会の善意(土地、農地の提供等)を受けて、定住、自活を始めている難民、避難民が多く見られた。UNHCRからの建材(レンガ)提供を受けて自ら住居を建設し、マイクロクレジットによるハウス栽培や家畜の飼育、ならびに小規模起業化が始められていた。一方、ミロシュビッチ政権崩壊以降初めて民主化しつつある市当局は、もともと失業者が多く経済困難を抱えている上に、難民を地域に受け入れることによる負担増、特に教育や医療、水供給、廃棄物処理といった社会サービスの低下への懸念を表わしていた。調査団が訪問したムニシパリティにおいても、

60 村のうち 18 村が受け入れ姿勢を示しているとの由である。難民、避難民の統合がセルビアの社会的安定にとって不可欠な課題であるとすれば、これら難民受け入れに積極的なムニシパリティを支援する観点からの協力も考えられる。他方、セルビア国内においてこのようなムニシパリティは数多くあると思われ、セルビア経済そのものが活性化しない限り全国規模での問題は解決されず、持続性も確保されない。また、ムニシパリティが援助に希望しているのは、主として橋梁、上下水道施設等のインフラ及び公共施設等であることから、わが方が想定するプロジェクトとは必ずしも一致しない。



●南部セルビア

南部セルビア（コソボ周辺地域）は開発の最も遅れた地域であり、貧困率は全国平均の2倍に達している。また、アルバニア系住民が多いことからコソボ問題の帰趨によっては不安定要因を抱えていることに加え、コソボ紛争によって未だ22万人の少数民族（非アルバニア系）がコソボ周辺地域に留まっていると報告されており、この観点からの援助ニーズは大きい。EUの資金によってUNDPは南部セルビアムニシパリティの行政能力強化を目指したプログラム、職業訓練やインフラ整備等のプログラム、及び失業者、貧困層に対する公共事業への短期雇用プログラムを実施している。いずれもアルバニア、ロマ、セルブ系等住民の政治的、社会的な安定を基本にしている。

4. マセドニア

2001年の内戦で同年8月には12万人の難民、避難民がでたと言われているが、既に95%が帰還あるいはコソボ、セルビアに移り住み、残り的人々が北西部の都市（クマノヴォ、テトボ、スコピエ）周辺に滞在している。アルバニア系、マセドニア系両民族の緊張関係のなかで、経済再建を図りつつどのように安定

した社会を実現していくのが鍵である。EU、OSCE、USAID、ソロス財団等の協力は、行政改革や地方行政支援、水供給を始めとするインフラ整備などに当てられている。これらの援助は、信頼醸成、民族融和を重要なコンポーネントとしているものの、例えば学校についてもアルバニア系との分離が進んでおり、現実的には困難な運営を強いられていると考えられる。調査団は、コソボ国境に近い複数のミュニシパリティを訪問し、市長やコミュニティ代表者との意見交換を行ったが、彼らが開発ニーズとして共通的に挙げているのは、上下水道と廃棄物処理である（下水が整備されていないため井戸が汚染され、飲料水に適さないという理由。）水供給については本年度内に無償資金協力によりスコピエ市周辺 20 村落の整備が行われる予定であるが、当該地域は安全確保の観点から対象外となっている。テトボ、スコピエ、クマノヴォ周辺は民族的に不安定な地域であり、先の内戦時にもこの周辺 81 村が直接的な被害を受けたと言われている。紛争予防と言う観点からは、このような地域における協力の意義は大きいですが、わが国大使館、在外事務所がなく支援体制が整っていない現状を踏まえれば案件実施への工夫が必要である。



協議議事録

1. オーストリア

訪問先：JICA オーストリア事務所

日時：10月18日（月）9:45

対応者：村岡所長、伏見職員

調査団側：全員

1. 橋本団長より、本調査目的及びスケジュール等説明
2. JICA オーストリア事務所より以下説明あり。
 - ・ 他ドナーからの情報収集が重要。特に対象地域で実績がある UNHCR や UNDP、USAID など。
 - ・ 支援の実施にあたり、過去に草の根無償で実施した施設等の活用も念頭においてほしい。
 - ・ JICA としては、難民が帰還中の地域において支援を行った事例がほとんどない。平和構築および人間の安全保障の先駆的なモデルにしていければよいと思う。
 - ・ BiH に対する国際社会からの援助資金額は激減している。BiH 政府は現在 EU 加盟準備に集中傾向あり。
 - ・ BiH 人権・難民省には、JICA としては今回初めてコンタクトする。
 - ・ 今回のプロジェクト形成調査では、帰還民の動きがある場所での JICA 初プロジェクト実施を目指している。
 - ・ 寡婦グループについては USAID など他のドナーも支援しているが、それだけをターゲットとせず他の住民も巻き込んで事業を実施する。
 - ・ 機材供与は方法としては簡単であるが、工事を伴うものは現地の受け皿に問題があり大変。工事の許認可は Canton の管轄だが、過去の事例では様々な問題があった（どこが工事の許認可主体であるかはその都度確認する必要あり）。

【調査対象地域の情報】

○ゴラジュデ

住民の 99%はムスリムという状況。周囲を RS で囲まれているため、プロジェクトには RS 側も巻き込めるようにすべき。

牛乳と果実の生産が中心。加工技術向上や販路拡大が課題。

乳製品加工場のミルゴールは管理能力向上が課題。JEN が日本の NGO 支援無償で支援を実施した。

○スレブレニツァ

ムスリム虐殺の事実を 2004 年 6 月に RS 側が認めたこともあり、支援を実施し易くなっていると思われる。

草の根無償で支援したビジネスセンターでは、起業家育成・コンピューター訓練等を実施中。寡婦も対象としている。

○プラトナッツ

戦前 65%いたムスリム住民は 15%しか帰還していない状況。

乳製品と農作物の品質改良・生産力向上などが課題。

訪問先：在オーストリア日本大使館

日時：10 月 18 日（月）10:30

対応者：上田一等書記官

調査団側：全員

1. 橋本団長より、本調査目的及びスケジュール等説明
2. 大使館より以下説明あり。
 - ・ 平和構築のプロセスの困難性。
 - ・ FBiH と RS の地域的なバランスが必要。本調査の趣旨は理解。
 - ・ 帰還を求める難民もいるが、ある程度避難先で定住もしている。
 - ・ ボスニアでは経済復興が一番の課題。
 - ・ 目に見える民族融和の成果が必要になっている。
3. 質疑応答

大使館：地域によって民族的な感情に濃淡がある。どこまで支援の可能性を探るか？

調査団：民族間の問題に関して、基本的に無理はしない。事業実施にあたり、意思決定は JICA 側ではなく地元住民側に委ねる。寡婦や帰還民のみでなく、地域の住民全体に裨益するような支援方法を探る。

2. サラエボ

訪問先：在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館

日時：10月18日（月）16:00

対応者：小滝大使、室谷書記官、斉藤アドバイザー

調査団：全員

1. 橋本団長より調査の目的と概要を説明。
2. 七海団員より、本調査によって策定されるプロジェクトでは、大使館が過去に実施した草の根無償との連携を図りつつ「人間の安全保障」の視点を取り入れたコミュニティー開発を行いたい旨説明。
3. 在ボ日本国大使館より以下説明あり。

○ゴラジュデ

- ・ 現在 Milgor の経営は農協主体。Municipality には移っていない。
- ・ Milgor の牛乳生産量は 6000 リットル/1 日が可能。しかし販路が確保されておらず半分ほどしか稼動しない状況（生乳不足が原因ではない）。
- ・ 草の根無償実施当時、JEN 等が周辺の RS 地域を巻き込み販路拡大を試みたが、失敗に終わった（民族的な感情から FBiH 製品が売れない、他国製品がマーケットを押さえている、などの理由が考えられる）。
- ・ Milgor はマネージメント能力が低い。最近では 2, 3 ヶ月に一度代表者交代がある（政治的な事情による）。よって、販路拡大にも新規事業展開にも積極的ではない。
- ・ Milgor の牛乳はサラエボでも販売しているが、ほとんど見かけない（10 店舗程度）。
- ・ 品質は良くとも、他地域と同じロングライフミルクでは、販路の拡大は困難と思われる。
- ・ 当地域では様々な国際機関が活動しているが、プロジェクトの実施主体は国際 NGO であることが多い。

○スレブレニツァ

- ・ 今年は異常気象のためマッシュルームがほぼ全滅状態。ハーブも収入減。
- ・ マッシュルームの代わりに果実（ベリー、プラムなど）の乾燥製品を生産中。

○プラトナツ

- ・ プラトナツで草の根無償が実現しなかった理由は、現地から実現可能なよいプロポーザルが出てこなかったため。
- ・ 特に当地ではローカル NGO のキャパシティが不明。農協も資金不足等の理由で活発ではない。カウンターパートとなり得る機関がみつけにくい。
- ・ ベリー類は戦前より栽培がさかんであった。

- ・ Return Commission が農業指導も行っている。

○起業家支援

- ・ 3地域に共通している最重要課題はマーケットの開拓。
- ・ マイクロクレジットに関しては大使館も実施していない。それを集中して運営するだけのマンパワー不足や個人への支援は実施しないことが理由。
- ・ 他ドナーが実施しているマイクロクレジットと連携することも一案。

○農協

- ・ 法に基づき登録されたものと思われる ⇒調査中に要確認。
- ・ 活動の許認可は各エンティティが出している。

訪問先：PCI エコツーリズム M/P 調査団（日本国大使館内会議室にて面談）

日時：10月18日（月）17:00

対応者：(株) パシフィックコンサルタンツインターナショナル 総合開発事業部

次長 伊藤金雄氏

調査団：全員

- ・ 2003年11月、エコツーリズムを通じた自立的地域開発のための開発調査として開始した。2005年3月終了予定。
- ・ 当事業はエコツアーと称されてはいるものの、単に観光開発のみを想定したものではなく、観光プラス農業支援の事業である。
- ・ 社会主義体制時の従来型観光事業ではなく、地域の人々が共に参加して、自分の地域を見直し、自慢できるような開発を目指す。そのため、パイロットプロジェクトの中でワークショップを20回以上開催し、新しい資本主義の中での観光とは何かの普及に努めた。
- ・ パイロットプランを北部・南部に合計3地区設定、その内2地区はセルビア系住民の地域でムスリムとの問題は特にない。さらに同地域では、クロアチア人との間で血を流した経緯はあるものの、域内同士で戦争が行われた訳ではないので特に問題はない。
- ・ 公営企業は消滅しているので、流通と消費のリンクが機能しておらず、自家消費のみに限定されているのが現状であり、その隙間をねらってヨーロッパ諸国の輸出攻勢が始まっている。彼らは十分な補助金による保護のもと事業展開をすすめているので、今後も脅威となりうる。
- ・ コミュニティーレベルの協力では、信頼できる現地NGOの見極めが重要。9年間に及ぶ各ドナーからの援助は、成果に平行して腐敗構造も生み出している。援助を食べ物にして

いる団体も存在しているので要注意。

- ・ 8 月半ばごろから生乳加工事業も開始した。海拔 900 メートルほどの集落を対象にしたもので、乳質検査後、生乳回収車を用いてノルウェー人経営の処理工場に販売している。
- ・ 小規模の乳製品加工工場は多く存在するが、競争力がなく共倒れしている状態。
- ・ EU 諸国から牛乳が輸出されてくるため、EU の圧力と国内産業とのバランスが重要。
(外国製品の方が安く品質も良いというイメージがあり、地元産品が売れない)
- ・ ワークショップの実施を通して、地元で信頼できる団体を発掘した。公示にかけて募集するという方法はとっていない。
- ・ 放っておいたままでは、エンティティをまたいでの対話や事業実施はない。ワークショップを重ねるうちに、元々は同じ経済圏であったことや両エンティティに共通の利益ということを認識し始めた。
- ・ ただし、実利があれば和解できるというのは机上の論理にすぎない。ワークショップを何回も実施するなど地道な活動を引っ張っていくコアになる力が必要。
- ・ コミュニティーレベルでは、現状では民族の住み分けがさらに進んでいる様子。
- ・ 地元住民はとにかく資金不足で地場産業を拡大していけない。マイクロクレジットを活用する必要もある。
- ・ 女性組織については政治的な力を持つ団体もあるため、地元情報を大切にすること。
- ・ 難民の帰還はまだまだこれからだが、スレブレニツァ、プラトナツ共に関国際 NGO が撤退している。プラトナツには有力なローカル NGO がないとも聞いている (UNUCR や OHR 等より)。

訪問先：Ministry of Human Rights and Refugees: MHRR (人権・難民省)

日時：10 月 19 日 (火) 9:30

対応者：Mr. Mujo Jejna (Assistance Minister)

調査団：村岡所長、全員

1. 橋本団長より本調査目的及びスケジュール等説明
 2. 村岡所長より JICA とは何かについて説明。
 3. 人権・難民省 (Mr. Mujo) より以下説明あり。
- ・ 2003 年 12 月に、BiH を 4 地域に分けて統括する regional centre (地域センター) を設立 (サラエボ、モスタル、バニャルカ、トゥズラの 4 ケ所)。難民・国内避難民関連の情報収集と地域における窓口の機能をもっている。

- ・ Canton (県) は、独自の予算をもち、独立した行政を実施している。
- ・ 多くの人々が帰還を希望しているが、それを実現するには予算不足。
- ・ 難民・避難民の中には、帰還しても保護が得られず再度避難先に戻る人々もいる。
- ・ 今回本調査団が訪問する3地域(ゴラジュデ、スレブレニツァ、ブラトナツ)は、支援の必要性が非常に高い。また、農業は同地域の帰還民にとって最良の生活手段。
- ・ 治安に関して、訪問する3地域は特に問題なし。
- ・ 現地視察の後、再度お会いしたい。情報提供等の協力を願う。

訪問先：UNHCR

日時：10月19日(火) 10:45

対応者：Mr. Udo JANZ (Representative)、Mr. John FARVOLDEN、もう一名

調査団：室谷(日本大使館)、山本、七海、中谷、渡辺

1. 山本団員より本調査目的等を説明。
2. UNHCR (Mr. Udo) より以下説明あり。
 - ・ サテライト事務所を閉鎖し、4つの地域事務所に業務を集約。
 - ・ BiHでの経験や知見をまとめている。また、Municipality Profileを作成している。
 - ・ BiH政府を中心とする業務実施体制への移行期。MHRRの地域センターの強化が課題(2004年のUNDPとMHのAssessment of MHRR of BiHを参照)。
 - ・ State、FBiH、RS各3名で構成されるState Committeeを中心(窓口)とする。
 - ・ Return Fundに関して、意見が異なる大臣、副大臣との調整、未経験スタッフの育成が課題。
 - ・ EU (CARDS) と政府とのマッチングファンド(それぞれ4百万KM)を活用して、UNDPがミュニシパリティと連携して、700-800軒の家を建設。
 - ・ 帰還民等が必要とする家は50,000軒であるが、年5,000軒しか供給できない。帰還→安定的な生計維持(電気や水等の基本的な供給)→地元民と帰還民との平等な利益を図った所得向上が重要。

3. 質疑応答

山本：MHRRによれば、多くの帰還希望(20,000人/月)が寄せられているが、国外難民10万、国内避難民30万という数値からするとその要請数は多すぎるのではないか？

UNHCR：既に帰還した人々の住宅等への要請も数に入っている。

訪問先：Federal Ministry Displaced Persons and Refugees

日時：10月19日（火）11:00

対応者：Mr. Avviija Muhović (Assistant of Minister)、Ms. Sabira Jahić

調査団：村岡、橋本、荒木、本郷

1. 村岡 JICA オーストリア所長より JICA について説明。また、当 Ministry より在ボスニア日本大使館に支援要請プロポーザルが提出されたことについても言及。
2. Ministry 側より以下説明あり。
 - ・ 現在のボスニアの問題は雇用不足である。帰還した人々には土地はあるため、農業で生計を立てることに期待している。
 - ・ プロポーザルを提出したプロジェクトは投資と農業を中心としたものであり、Ms. Sabira が担当している。

3. 質疑応答

調査団：日本・JICA からどのような支援を得られるとイメージしているか？

Ministry：専門家派遣、機材供与、資金提供等を期待。

調査団：機材などを帰還民に与える場合、誰が管理するのか？

Ministry：地域ごとに委員会を設置する予定。

調査団：それらを動かせるローカル NGO はいるか？

Ministry：まだローカル NGO が関わっていないことが問題。

訪問先：USAID

日時：10月19日（火）15:00

対応者：Mr. Peter S Flynn (Sr. Program Coordinator)、Mr. John H. Seong (Director, Economic Restructuring Office)

調査団：山本、中谷、渡辺

1. 山本団員より調査目的等を説明。
2. USAID より以下説明あり。
 - ・ 法整備が重要。
 - ・ 当初はドナー間で支援分野や地域の重複があったが、北東ボスニアは USAID が担当、南

東は世界銀行。スレブレニツァやブラトナッツは支援すべきことが多く、ドナー間での支援の棲み分けに問題はない。

- ・ 主要支援分野は、農業・農産品加工・観光である。特に前者2つに重点。
- ・ 既に販路がある女性中心のハーブ生産支援からは、資金の関係で撤退（JICAが引き継いでくれることを期待）。
- ・ JICAが支援対象とするミュニシパリティとしては、ゴラジュデが人的にもしっかりしている。ミュニシパリティへの支援は、十分に注意をして行う必要がある。

訪問先：UNDP

日時：10月19日（火）15:00

対応者：Ms. Hideko Shimoji、Ms. Sabina Žunić 他2名

調査団：橋本、七海、荒木、本郷

1. 橋本団長より調査目的を説明。
2. UNDPよりボスニアで実施中のプロジェクト概要について説明あり。
 - ・ Municipal Assessment Planning Project を実施中。25のミュニシパリティを選定し、1ミュニシパリティにつき3~4ヶ月ほどかけて調査をしている。
 - ・ 本調査団の調査予定地であるスレブレニツァとブラトナッツも、上記調査に含まれている（ブラトナッツについては、すでに報告書があがっている）。
 - ・ Small Enterprise にも力を入れている。スレブレニツァのビジネスセンターとも連携している。
 - ・ プロジェクトの詳細情報等はWeb上で公開している。

訪問先：OHR

日時：10月19日（火）16:00

対応者：片柳 真理 (Political Adviser)

調査団：橋本、七海、本郷

1. 橋本団長より、調査の目的とこれまでの面談者から得た情報の概要を説明。
2. OHR片柳氏より以下概要説明あり。
 - ・ OHRは現在エンティティ別ではなく国レベルの機能強化を目指している。プロジェクト実施の際にどこと話を進めていくべきかについては、国際社会（ドナー）全体の傾向も

OHR 同様、エンティティレベルではなく国全体としての対応を強化する方向である。

- ・ 各行政組織をどこまで巻き込んでいくべきかについては、誰を対象にどこで何のプロジェクトを実施するかによる（例えば、土地使用に関しては Canton の許可を得ねばならない）。

（以上の説明を受けて、調査団の方針としては、国際社会の流れに従い地元から中央政府直結でのプロジェクト実施を考える旨伝えた。）

【各地域の情報】

○スレブレニツァ

- ・ 片柳氏が日本大使館在外専門調査員当時に関わった草の根無償案件。
- ・ 寡婦組織は政治色が強い傾向があるため、事業実施の際には注意が必要。
- ・ いくつかの女性組織が存在しており、民族混成のグループもある模様。しかしいずれもまだ歴史が浅く弱小。
- ・ ビジネスセンターが入っているビルは地域の文化センターでもある。ここの所長（セルビア人女性）は積極的な活動を行っているため、リソースパーソンとなり得る。
- ・ 当地域ではベリー類、マッシュルーム、ハーブの栽培が有力。ベリー類は乾燥させて西ヨーロッパ方面に輸出可能だが、他地域でも同じ市場を狙うため競争が厳しい。品質としては競争に足るものと思われる。
- ・ 課題はマーケティングと品質管理（パッキングや形状の統一など）。
- ・ UNDP はローカル NGO と連携したプロジェクトを実施しており、情報が得られると思われる。特に STRA プロジェクトの担当者にはコンタクトをとるべき。
- ・ 草の根支援は当時 Care International を実施主体としていたが、現在同団体はスタッフの地元化が進んでいることもあり、かつての運用能力とは異なるため、カウンターパートには不向きと思われる。また EU 色が強く、日本のプレゼンテーションを示しにくい。

○ゴラジュデ

- ・ 現在 Milgor の組織運営体制に問題がある。
- ・ Canton ゴラジュデは、Municipality ゴラジュデよりもさらに政治的影響力が強い。
- ・ Milgor の工場自体のキャパシティは足りている。販路拡大ができていないため、工場をフル稼働させることができない状態。
- ・ 草の根無償を実施した 2001 年当時、ミルク関連のプロジェクトは新しかったが、どこかで成功すると他地域も皆同様に始めてしまうため、競争が激しくなり共倒れの結果を招いてしまっている。

○プラトナツ

- ・ 地域のキャパシティやカウンターパート不在などの問題で、事業実施には困難を伴う。
- ・ RS 側でプロジェクト実施地域を選定するならば、以前草の根で苗木を提供したルドーも一候補。

【その他】

- ・ 農協をカウンターパートとして、機能強化を図ることは有効。現在のボスニアではまず、計画的に作物を作り、出荷し、収入を得るといった基本的なシステムが必要と思われる。
- ・ ただし、長期で専門家などが滞在し、定期的に農協の活動をチェックすることは必要(いつの間にか全ての活動が停止してしまっている、という例があるため)。
- ・ 農協は法に基づき登録された組織である。

訪問先：THE WORLD BANK Country Office Bosnia and Herzegovina

日時：10月19日(火) 16:40

対応者：Mr. Goran Tinjic

調査団：山本、荒木、中谷、渡辺

- ・ 世銀が行っているほとんどの事業については、ウェブサイトを参照。
- ・ 今回 JICA が想定しているような事業は、UNDP と緊密な関係を保つことが重要であろう。特に、スレブレニツァには UNDP の事務所があるので、訪問を勧める。
- ・ どのような事業も、最終的な課題はマーケットの開拓につきるであろう。
- ・ 当国で10年後も存在する政府機関はミュニシパル・ガバメント (M.G) であろう。とすれば、現在の事業も M.G を対象に考えることが順当であろう。
- ・ 世銀はヘルツェゴビナ地方を中心に担当している。

3. ゴラジュデ

訪問先：Agricultural Cooperative Agropodorina in Gorazde

日時：10月20日(水) 10:10

対応者：Ms. Nasiha Dzaka (Deputy Director)

調査団：全員、UNHCR 職員

- ・ 当組合の機構等については資料を参照願いたい(資料入手済)。
- ・ 現在最も力を入れている事業はりんごの販売とジャガイモの種生産である。

- ・ 健康志向ブームにのっとり、当農場で栽培されているりんごはすべて無農薬栽培である。
- ・ りんごの苗をポット栽培し農家に配布している。
- ・ 栽培に関する技術的な問題は特にない。
- ・ 当面の課題は、生産物の貯蔵倉庫の確保である。現在の倉庫は借りものであり、できれば冷蔵設備を有した倉庫が欲しい。
- ・ 生産されたりんごはすべて販売されており、現状ではマーケットの問題はない。
- ・ 土地を持たない帰還民を対象とした雇用対策にもなっている。

訪問先：Agricultural Cooperative Agropodorina in Gorazde

日時：10月20日（水）12:20

対応者：Mr. Sukrija Basic (Director)

調査団：全員

- ・ CEFA（イタリア系農業支援 NGO）からの支援を受けている。
- ・ イタリアから専門家を呼び、近隣農家に対する研修を行っている。
- ・ ゴラジュデでは90%が帰還民。UNHCRが家屋を再建してくれたが、職はない。
- ・ 戦前は工業地だったが、現在は農業をやるしかない。
- ・ CEFAでは、研修を実施した農家に対して無料奉仕・無料配布（苗等）はしていない。初収穫の収入より少しずつ返金してもらう方式を採っている。
- ・ りんごは2005年に初収穫予定。ラズベリーは2004年に初収穫があった。
- ・ ベリー生産・販売が主な事業。ラズベリーは栽培が困難だが、冷凍ラズベリー市場は期待できる。
- ・ 市場については現在のところ問題はなくすべて販売されている。今後は冷蔵設備のある倉庫を設備して遠距離の市場にも販売したい。
- ・ 今は季節的に収穫末期でそう忙しくはないが、最盛期には多忙で作業員が不足する状況である。
- ・ りんごは、新品種を導入するなど工夫しており、苗木は農家へ販売もしている。
- ・ 栽培した苗木を販売する際には、エンティティから販売許可を得ている。
- ・ UNHCRからもいろいろな形で援助されている。今後は JICA から協力をお願いしたい。
- ・ ちょうど農家研修を終えたばかりで、十分な対応ができず申し訳ない。
- ・ 堆肥の調整を行って、地力の増大をはかるべきだが現在は行っていない。
- ・ 現在 CEFA はマネージメントからは手を引き、モニタリングを行っている状態。

- ・ モスタルでも新規プロジェクトを開始した。

訪問先：CARITAS（スイスの国際 NGO）

日時：10 月 20 日（水）16:00

対応者：Dr. Monique Frey (Delegate Agriculture project Eastern Bosnia), Mr. Hemo Jusovic (Expert Fruit)

調査団：全員

1. 橋本団長より、調査団目的等の説明
2. CARITAS より
 - ・ SIDA から支援を受けている。
 - ・ 2004 年の 8 月から活動開始、2009 年までの予定。
 - ・ ベリー栽培と酪農振興を中心としている。
 - ・ CARITAS は融資機能も有している。融資制度としては、年率 4%、2 年間のグレース、3 年間で返却。融資額は 1,000-3,000KM。
 - ・ 2009 年までには、110ha を目標に農地拡大予定。川沿いの土壌は良好。個人の農家でも 2ha を所有している。
 - ・ 果実類は有機農法により栽培している。
 - ・ Milgor は毎日ではなく、週 3-4 回しかミルクを回収していない。マネージメントの問題有り（8 農家、Canton もシェアホルダー）。スロベニアからの輸入ミルクもあるが、地元でのミルク消費は可能（市場はある）
 - ・ ゴラジュデでは、全ての酪農家が個人経営の状態である。
 - ・ スウェーデン民間会社（ボスレット？）がスレブレニツァ、プラトナツでミルク事業を展開している。
 - ・ Fact finding mission が終了し、農業等の事前調査レポート有り（ただしドイツ語）。

訪問先：ゴラジュデ Canton (県)

日時：10月21日 9:00

対応者：Mr. Salko Obhodas (Cantonal Prime Minister)、Kenan Kanlic (Head of dep. for management and coordination of development resources), Sisercic Rasim (Head of agriculture dep.), Ms. Anka Curovac (Head of De. for public relations Gov. BPK Gorazde), Nazif Uruci (minister for social politics, health, displace persons and refugees), Mustafa (ministry of economy)

調査団：全員、UNHCR 職員 (Ms Nefisa Medosevic)

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明。
2. Canton 政府側より以下説明あり。
 - ・ Cooperative の登録は、Canton の Justice で行う (法規は連邦法 Federal law)。
 - ・ ゴラジュデ Cantonal レベルでは、Ministry of Economy (Agriculture), Ministry of social politics, health and Refuges, Ministry for solder question, Ministry of Justice, administration and work relationship, Ministry of education, science, culture and sport, Ministry of inferior affaires の各省がある。
 - ・ ゴラジュデ県は、ゴラジュデ、Pale、Foca ミュニシパリティを管轄。
 - ・ 政治的状況は安定している。
 - ・ ミルゴールもいろいろ問題はあるようだが、当方には全く関係のないことであり、今後も関わることはないであろう。
 - ・ カントン政府としては住民の農業振興事業にも援助する。クレジットの提供及び経営上のいろいろな局面でアドバイスしている。
 - ・ 帰還民への援助としては、100ha の土地を用意して政府との間で農産物の契約栽培を行っている。
 - ・ ミュニシパリティとカントンの相互関係は問題ない。仮に JICA がカントンとの間で事業を行っても問題はない。

訪問先：BEKTO 工場

日時：10月21日 (水) 10:20

対応者：Mr. Ahmo ADZOVIC (Director)

調査団：全員

- ・ この工場の社長は、10数年前オーストリアに出てビジネスを学び、帰国後この会社を設

立した。

- ・ メタルパーツ、ペットボトル、プラスチックツールなどを製造。
- ・ 従業員は地元の人々中心。特殊技術を必要とするため、工場にて訓練している（職業訓練センターを別の工場に併設している）。1日2～3シフト制。

訪問先：ゴラジュデ Municipality

日時：10月21日（木） 10:30

対応者：Nihad Hadziahmetovic (Director MPI 'MLIN'), Esad Kulenida (Board for Return, Agriculture engineer), Lukovac Bajro (Agriculture engineer), Lakovic Indira (Cooperative expert for agriculture), Obarcanin Haris (Agriculture inspection), Gacanin Meliha (Cooperative expert for agriculture), Bucu Ferid (Minister for Economy), Sijercic Rasim (Head of Economic Dep.), Nasiha Dzaka (Cooperative "Agropodrinie"), Kanlic Kenan (Head of dep. for management and coordination of development resources), Basic Midhad (Attorney Deputy Minister), Fadil Salkovic (Senior advisor/ Gorazde Municipality)

調査団：全員、UNHCR 職員 (Ms Nefisa Medosevic)

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明
2. ミュニシパリティより以下の説明あり。
 - ・ ゴラジュデは特にりんご等果物の名産地である。マーケット確保が重要。冷蔵設備も必要である。
 - ・ 農学者組合 (Agricultural Association) が Canton 全域をカバーしている。
 - ・ 日本の NGO の JEN の活動は高く評価している。
 - ・ 組織図等の説明は後日 (コンサルタント団員の再訪時) 行う。

訪問先：ミルゴール

日時：10月22日（金） 9:15

対応者：Ms.Vasvija Halac

調査団：全員

- ・ ミルゴールの事業運営については様々な問題があり、現状では工場の機能が最大限利用されているわけではない。施設の不動産関係を例に挙げれば、依然公的財産であった部

分についても個人への売却が進んでおり、管理の面でかなり混乱している。

- ・ 当牛乳処理施設の最大能力は、日量 6000 リットルであるが、現状では 30%ほどの稼働率に留まっている。理由は主に次のようなものである。
 - ① 牛乳生産の部分ではフレッシュミルクを生産しているが、食品衛生法で賞味期限が 3 日間と規定されており、遠距離販売が困難で販路が限定されている。
 - ② ①の問題に対する対策としてチーズ・ヨーグルト等の加工乳製品を生産しているが、販路の開拓不足で現状でも在庫が溜まっている（チーズは品質は良いが値段が高くて販路なし）。
- ・ 抜本的な対策としては、サラエボ等大消費地に販路を求めることが重要である。そのためにフレッシュミルクの他にロングライフミルクの製造を検討したい（フレッシュミルクはマーケットがみつけれない）。
- ・ 牛乳生産に対する酪農家のモラルの面でも課題がある（生乳の販売時に水を混入させて増量を図る、脂肪分を高めるために料理用油を混入する等←購入価格は脂肪分量によって決まるため）。
- ・ 酪農家 1 軒あたり平均 2 頭の乳牛を所有。
- ・ 当処理場の事業回転資金が十分でないため、酪農家への生乳購入代金の支払いが遅れることもある。
- ・ 酪農家には組合等の組織があるわけではなく、単にミルゴールが収集し代金を支払うというシステムがあるのみ（月 2 回酪農家を集め、支払い状況などにつきミーティングを実施中）。
- ・ 牛乳生産・乳製品加工ともに、技術的な問題には直面していない。
- ・ RS 側の酪農家からも生乳の収集は行うが、RS 側にはマーケットがない（購買を拒絶された）。

訪問先：The fruit freezing plant in Kopaci

日時：10 月 22 日（金）10:00

対応者：Mr.Slobodan Rakanovic (Chief of Production)

調査団：全員、UNHCR スタッフ

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明し、工場を視察。
2. 企業側より以下説明あり
 - ・ 市場は十分ある（輸出）が、ベリーの集荷量が足りない。

- ・ 当地域最大の輸出企業。
- ・ ラズベリーは高価格で取引可能（ただし品質による）。ブルーベリーは野生のものしかない。
- ・ マーケットをセルビアに拡大中。あちらでは BiH 国内よりも高値で売れるが、運搬コストは高くなってしまう。

(JICA) ベリー生産者組合をつくり、技術指導を行いつつ、ベリー生産量を増産してはどうか？

(会社) その考えはない。

訪問先：Regional Board in Gorazde

日時：10月22日（金）14:00

対応者：Mr.Himzo Bajrovic (President), Ms.Dahiborka Milovic (Account)

調査団：全員、UNHCR スタッフ

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明
2. Regional Board より以下説明あり。
 - ・ 10のミュニシパリティで構成(Gorazde、Pale、Foca、Rogatica、Srpsko、Cajnice、Srbinje、Visegrad、Rudo、数要確認)。ゴラジュデが本部。支部は各ミュニシパリティにあり、それぞれコンタクトパーソンがいる。
 - ・ メンバーはRS側とFD側両方で構成されている mixed organization であり、帰還民のニーズを最も把握している機関である。
 - ・ UNHCR、CARITAS、IRC、JEN等からの支援を受けている（JENは終了）。
 - ・ 主な活動は、住民帰還促進、住宅改修、農業支援、店舗やBEKTO等の工場からの要請に応じた職業訓練（クラフト、メカニック、食品加工など）。
 - ・ 農業では小規模栽培や小規模酪農が中心(Small Business Project)。
 - ・ りんご加工品（ビネガー、ジュース、ジャム等）生産支援を行っている（CARITAS/CEFAと連携）。
 - ・ 農業関連の技術協力は必要である。
 - ・ 現在はUNHCRとUMCORの2プロジェクト（ファイナンス系）を展開中。

4. ミリチ

訪問先：UNHCR との昼食会（スタッフ紹介）

日時：10 月 23 日（土）12:00

対応者：Mr. William Tarpai (Head of Sotula)、Ms. Svjctlana Dejalahi (Asst. Durable Solutions Officers)、Mr. Midhat Mujanovic (Assoc. Programme Officer)、Ms Djurdjica Zoric (Protection Assist)、Mr. Ljubisa Danojlovic (Field/ Protection Assistant, UNV)、Ms. Sabina Nadzakovic (Secretary)、

調査団：全員

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明
2. UNHCR 側からのスケジュール説明
3. 自己紹介、歓談

訪問先：Nova Kasaba School

日時：10 月 23 日（土）14:30

対応者：コミュニティーメンバー（男性 25 人、女性 10 人、子供 5 人）

調査団：全員、UNHCR メンバー

1. UNHCR トウズラ所長及び橋本団長より、目的等の説明と JICA 調査団の説明。
2. コミュニティー側より以下の意見あり。
 - ・ Millic ミュニシパリティからの支援はない（不満がたまっている）。
 - ・ 250 帰還民家族（ボスニアック）全員失業中。
 - ・ 学校の修復が終わっておらず、子どもたちは隣のミュニシパリティの学校へ通っている。子どもの通学にも月 22 ユーロかかる。
 - ・ IRC (International Rescue Centre、アメリカ NGO) が家屋再建の材料は提供してくれたが、工事を寡婦が行うのは困難。
 - ・ 家の改築・水供給・電気供給等が課題。

訪問先：個人養鶏所

日時：10月23日（土）14:10

対応者：女性2人（オーナー）

調査団：全員、UNHCRメンバー

- ・ UNDPの3年計画の regional recovering programe を活用（技術指導、融資（?））
- ・ Millic ミュニシパリティからの支援は何もなかった。
- ・ 6,000羽を飼育。飼料にお金がかかるが、運営できている。月収は3,000KMで従妹と半々。
- ・ UNDPの技術指導は有益であった。

訪問先：Cersk Community

日時：10月23日（土）15:30

対応者：コミュニティーメンバー

調査団：全員、UNHCRメンバー

- ・ 現場視察
- ・ 約200世帯が帰還している。

訪問先：Konjevic Polje Community

日時：10月23日（土）16:30

対応者：コミュニティーメンバー

調査団全員、UNHCRメンバー

- ・ 現場視察

5. スレブレニツァおよびプラトナツ

訪問先：サイトの視察（Osat school）＊スレブレニツァ市街地より南東へ約30km

日時：10月24日（日）10:20

対応者：

調査団：橋本、七海、本郷、中谷、UNHCRメンバー（A Team）

- ・ 今は30人ほどしか生徒がいないが、戦前は1000名の生徒がいた学校である。
- ・ 現在は学校が唯一の公共施設。

- ・ 家畜飼育やベリー栽培を行っている。ベリーは買い手が見つかった。フリーザーも所持している。
- ・ 家畜の数は少なく、生産される牛乳は村内で消費するのみ。
- ・ インフラの整備が第一。道が悪いため町に出るのも大変。冬季はアクセスが遮断される（調査団注：山中の未舗装道路一本しか通っていない）。
- ・ バスは一日一便で、それも村の入り口までしか来ない。
- ・ 医者は毎木曜日に来ることにはなっている。病院は約 30 km離れたスレブレニツァにしかなく、急病人が出たときは大変。
- ・ 通信手段は携帯電話のみ（ただし通じにくい）。

訪問先：Women's Association (Podrinje One) *スケラニ

日時：10月24日（日）12:00

対応者：

調査団：橋本、七海、本郷、中谷、UNHCRメンバー（A Team）

- ・ ボランティアの女性スタッフたちが運営している。中心になっているのは5名ほど。
- ・ スケラニ地区全体を活動対象として農業や裁縫等のトレーニングプログラムを実施。
- ・ 各国ドナーよりプログラムに対して資金協力を受けている（プロポーザルを書いて申請する）。
- ・ 各トレーニングには専門家やプログラムマネージャーを配置。費用はプログラム運営費で賄われる。
- ・ この地域は土地も肥沃で、農業には最高の条件を備えている。
- ・ Farmers association も併設していて、農業技術者もいるので農家も安心して仕事に取り組める。
- ・ 羊の乳、チーズ、バターの製造・販売を行っている（草の根無償で冷蔵庫を供与）。
- ・ 新規畜産農家には牧草の種の供与も行っている。
- ・ ローカルコミュニティーにも溶け込んで良い関係になっている。
- ・ Psycho Social Support という、女性世帯主家庭を対象としたプログラムを実施。紛争により傷ついた心をケアするためのプログラムもあり、セルビアより専門の講師を招きワークショップ等を展開している。
- ・ Health Support/Care も実施。周辺地域から医者を招き健康診断等を行う。

訪問先：住民リーダー宅 *スレブレニツァ

日時：10月24日（日）12:00

対応者：住民リーダー（男性、ボスニアック）

調査団：橋本、七海、本郷、中谷、UNHCRメンバー（A Team）

- ・ 2002年に帰還。ミュニシパリティからの支援は減少している。
- ・ この地域はボスニアックのみ居住。帰還したのは年金暮らしの人が多く、シングルマザーも多い。
- ・ 村は水道未整備。
- ・ 地域には牛が少しだけいる。販路がないため、自家消費用の食料のみ生産。
- ・ 戦前はこの地域の住民は Sase 鉱山で働いており（1800～2000人程度）、自分もその一人だった。今は300人程度が働くのみで仕事はない。
- ・ この地域では若者に未来はない。

訪問先：Osamsko community *ブラトナツ

日時：10月24日（日）9:40

対応者：Mr. Nikolich (Bratunac Mayor), Returnees C (Mr. Jarkovich Strahinja, Mr. Gdich Azurir), Jasmin Muminovich (representative LC Osamsko)

調査団：荒木、伏見、山本、渡辺、UNHCRメンバー（B Team）

- ・ 水の確保が課題。
- ・ 年利18～20%のマイクロクレジットを活用。ベリーと小規模な酪農。

訪問先：Mihaljevici and Krasan polje *ブラトナツ

日時：10月24日（日）10:10

対応者：コミュニティーメンバー（男性15名、女性6名）

調査団：荒木、伏見、山本、渡辺、UNHCRメンバー、B. Mayorも同行（B Team）

- ・ 93世帯で内25世帯はボスニア人。15～16家屋を改修。
- ・ 若い世帯の10世帯を含めて32世帯が帰還を希望しているが、試験的に2～3ヶ月滞在するが、所得の問題で断念。
- ・ 耕作地拡大には、農業機械が必要（1トラクター、3耕耘機）。
- ・ ペンション生活者はいるが、ほとんどが失業中。

- ・ 組合づくりには否定的。
- ・ マイクロクレジットは、EKI や Partner から借りている。保証人が必要。金額は 1,000 から 3,000KM。返却期間は短く、1 年未満。

訪問先：AGROS（ベリー及びカタツムリ冷凍工場） *ブラトナツ

日時：10 月 24 日（日）14:30

対応者：Mr.Mico Stanojevio (Owner), Mr. Helix (Manager)

調査団：荒木、伏見、山本、渡辺、UNHCR メンバー、B>Mayor も同行 (B Team)

- ・ 1990 年、全国ベリー生産 4,000 トン内年間 2,500 トンを当地で生産。現在の 1,000 トンから 5,000 トンを目標。
- ・ 欧州がマーケットでベリーの品質向上（新種苗木の導入）が課題。
- ・ 5 月から 9 月までの幅広い期間で工場を稼働させる為には、苺、ブルーベリー、新種ベリーの導入が必要（工場は 50 人の季節労働者を雇用）。
- ・ 150 生産農家と契約。
- ・ 耕作地の半分は使われてないので、ベリーの生産量を増やすことは可能。

訪問先：Bratunac Municipal Return Commission

日時：10 月 24 日（日）15:30

対応者：Returnees C (Mr. Jarkovich Strahinja, Mr. Gdich Azurir),

調査団：荒木、伏見、山本、渡辺、UNHCR メンバー (B Team)

- ・ 事務所視察（机が 2 つ、PC1 台）。
- ・ 質問表による住宅等の復興関連情報の収集が中心。データベース化を図っている。

訪問先：Poloznik Community *ブラトナツ

日時：10 月 24 日（日）16:30

対応者：コミュニティーメンバー（男性 18 人、女性 7 人、若い世帯が多い）

調査団：荒木、伏見、山本、渡辺、UNHCR メンバー、B>Mayor も同行 (B Team)

- ・ オーストラリア NGO (BTZ) が仮説木造住宅を建設（山頂に）。内戦前は 35 家族が生活していたが、現在は 14 家族。ポテト生産。農業のみ所得の可能性有り。葉たばこやベリ

一生産を考えている。

- ・ イスラムカウンセル（イラン大使館）からの牛の供与。飼育方法についての技術研修は必要。
- ・ 50年以上たった樹木は価値が高く、林業のポテンシャルはたかい。しかし、許可が必要。
- ・ 皆で選んだ代表1名がいる。
- ・ 農道アクセスの補修には、10,000KM/km必要で幹線まで約5km。

訪問先：OHR/OSCE *ブラトナツ

日時：10月25（月）9:30

対応者：Mr. Darko Sekulic (OHR, Bratunac), Mr. Peter Spremo (OSCE, Education Officer),
Mr. John Mackillop (USAID)

調査団：全員、UNHCRメンバー

1. 橋本団長より、本調査の目的等の説明

2. OHR

民営化により経済開発振興。鉱業部門の民営化をWBが実施。投資先として農業部門が有力。スウェーデンがBosAgroを設立（ベリーの冷凍、輸出会社）。

- ・ 人権にも配慮し、モニタリングを行っている。

3. OSCE

Education, Democratic, Human Rightsの3つの部門

職業訓練校があつたが、いくつかの学校で再建中

OSCEの主な役割としてはモニタリング（人権、経済開発）がある。

4. UNDP

- ・ Srebrenia Regional Recovery Programmeは、インフラ整備、市民社会、経済開発のコンポーネントから構成。短期的な実効性に配慮。Returnees Cにも支援

5. USAID

- ・ 牛、羊等家畜を個人酪農家に対して供与。
- ・ 共同出荷を行う組合（Association）への支援。Cooperative Lawがあるので後日送付。

6. Vasa Prava

- ・ イタリアNGOが元で、現在ローカルスタッフのみ。
- ・ 400農家で構成されている組合にベリー苗木等の支援を実施中。

7. Danas Sutra

- ・女性のための小規模起業支援グループ (25 日に訪問)。

訪問先 : Danas Sutra *スレブレニツァ

日時 : 10 月 25 (月) 15:00

対応者 : Ms. Nada Jovanovic (president)

調査団 : 橋本、七海、本郷、渡辺、UNHCR メンバー

- ・ ハンディクラフトと農業を中心に、帰還民に対してトレーニングを行う女性団体。
- ・ 制作した作品などは Bosfam という NGO を通じて販売し、自己資金に充てている。
- ・ 有給スタッフは 3 人、他のスタッフは無給 (ボランティア)。
- ・ メンバーは 140 人ほど。寡婦が中心だが、希望者は誰でも受講可能。
- ・ 以前 (04 年 7 月まで) はドナーからの資金提供を受けていたが、現在ほとんどの運営は自己資金で賄っている。
- ・ 例えば裁縫クラスには 10~20 人の女性が参加している。
- ・ ニーズ調査も実施。

訪問先 : Srebrenica Business Centre

日時 : 10 月 25 (月) 15:30

対応者 : Ms. Nada Jovanovic (president)

調査団 : 橋本、七海、本郷、渡辺、UNHCR メンバー

- ・ 研修内容はビジネスマネジメント、特にファイナンス関連。
- ・ コミュニケーション方法についても講義している。
- ・ ビジネスネットワーク構築も実施中。
- ・ 日本 (草の根無償) 及び UNDP から支援を受けている。
- ・ 参加費は徴収できる状態ではない。
- ・ 受講者募集は、一般の広報媒体 (ラジオ、地元新聞、教会の案内板等) を使用して行うが、噂を聞いて受講を希望する人もいる。

訪問先：Srebrenica Municipality & Return Committee

日時：10月25（月）16:00

対応者：

調査団：橋本、七海、本郷、渡辺、UNHCRメンバー

1. 橋本団長より調査目的を説明。
2. Return Committee より以下説明あり。
 - ・ OHR、UNHCR、UNDP など一緒に活動している。
 - ・ ミュニシパリティ内の組織ではなく、意思決定権を持っていない。
 - ・ 帰還民の数をモニタリングすることが非常に困難（マンパワー不足、帰還者の出入りが激しい）。
 - ・ 帰還民には 40 m²の土地が与えられる。農業を始めるには十分な面積である。
 - ・ ミルクやチーズ等の乳製品の販路を見つけることが重要課題。
 - ・ トゥズラの Regional Centre とよい関係で業務を進めている。情報交換もしている。
 - ・ 当地域の地雷は、それほど深刻な問題ではない。
3. スレブレニツァ Mayer より以下説明あり。
 - ・ 19 のローカルコミュニティ（MZ）がある。
 - ・ 当地域での有力産業は、肥沃な土壌を利用した農業と家畜飼育（ミルク、肉）である。
 - ・ 水関連資源（スパなど）も豊富で、観光産業も有力。
 - ・ 家具工場は再開されたが、私企業のためミュニシパリティには権限なし。
 - ・ 帰還促進のためには住居整備のみではなく経済基盤の整備、雇用促進が不可欠。
 - ・ スレブレニツァの田舎に住む高校生は街中の高校に通わねばならず、ドミトリーが必要。日本からの支援を期待している。

訪問先：マイクロクレジット関連 NGOs （プラトナッツの OHR 事務所にて）

(MELCY CORPS、UMCOR、SWISS CARITAS、The Lutheran World Federation-LWF)

日時：10月26（火）9:30

対応者：

調査団：全員、UNHCRメンバー

*各組織の活動詳細は収集資料（事業報告、プロシヤーなど）で要確認。

1. MELCY CORPS

- ・ EC、UNHCR、USAID 等からのファンドで運営。

- ・ 支援農家では主にベリー類、ミルク（ラクトフリーザーあり）、野菜を生産。

2. UMCOR

- ・ マイクロクレジットを中心とした組織。
- ・ 借り手の90%が帰還者。
- ・ オランダからのファンドで運営している。

3. Swiss CARITAS

- ・ SIDA との連携プロジェクトを実施中。

4. LWF

- ・ SIDA との連携プロジェクトを実施中。

5. 全体としての情報

- ・ NGO 同士のネットワークがあり（UNHCR がコーディネートしている）、情報共有もしている。
- ・ ローカルコミュニティを巻き込んで事業を実施する。彼らが地元について最も多くの情報を持っている。
- ・ スレブレニツァで最も困難なのは投資促進。しかし、ビジネスを展開したとしても顧客がいない。
- ・ 帰還民は生活手段として仕方なく農業を始めているが、元々農家であったわけではないため技術や経験の蓄積も浅く、困難である。
- ・ 全ステークホルダーが同じ方法で帰還促進をサポートできると理想的。

6. トゥズラ

訪問先：The Lutheran World Federation

日時：10月26日（火）午後3：20

対応者：

調査団：橋本、七海、荒木、中谷

- ・ この組織の本部はウィーンにあり、トゥズラの栽培施設は1995年に作られた。
- ・ この施設は、畜産・野菜・果樹作等々、ほとんどの農業をカバーしているが主要な部門は野菜の温室栽培である。
- ・ 資金援助はSida からのものがメインである。
- ・ 施設内建物は、戦前の物も工夫して利用している。例えば、灌漑用の水源タンクは、以前はプールであったものを修理して再利用している。

- ・ 温室栽培のメリットは、通年して地域の農家や関係者に作物栽培のトレーニングを受けさせることができることである。
- ・ これまでの実績では、トゥズラの農業高校の学生や大学農学部学生のトレーニングを継続して行ってきた。
- ・ 地域農家への貢献としては、近在の6カ村から新規農業参入者を対象にトレーニングを実施している。ほとんど人はかつて工場で働いていた人で農業は未経験者である。そのためトレーニング終了後も指導を行っている。未経験者でも土地を持っている人は、3年目には完全にひとり立ちしている。

訪問先：Collection Centre (C.C.)

日時：10月26(火) 16:00

対応者：Ms. Vesna Zajrvić (UNHCR Field staff, UNV)

調査団：伏見、本郷、山本、渡辺、UNHCRメンバー

- ・ 1995年頃に逃げてきた人々が中心。最高で780人が滞在したが、現在は387人。
- ・ 1軒の建物に2家族が居住。建物はオランダ政府の支援によるもの。
- ・ 面積は49㎡(土地はミュニシパリティの所有)。トゥズラ市街に続く大通りから2,3km奥に入った場所にある。
- ・ 現在、ここの管理はUNHCRからミュニシパリティに移っている。
- ・ 小学4年生まではC.C.内の小学校で学べる。
- ・ 小学校施設内には保健室的な機能の部屋を設置しており、毎週木曜日に医師が回診に来ている。
- ・ C.C.内各戸の水道は、メーターが付いていない(使用料金を支払っていない・請求なし)。電気は料金を支払うが、メーターが複数家庭共用のため、各家庭の人数で頭割りしている。
- ・ 亡くなった家族の年金で生活している。女性世帯主家庭は16世帯。
- ・ スレブレニツァより24万人が一度にトゥズラに流入したため、トゥズラには108のC.C.があった。
- ・ すぐ横には炭鉱があり、紛争中も稼働していたが、IDPの雇用にはつながっていない。

訪問先：Regional Centre Tuzla

日時：10月26(火) 17:00

対応者：

調査団：全員、UNHCR メンバー

- ・ 2004年1月に開設された。
- ・ 現在スタッフは4人。3民族から必ず1人は選出されている（構成はボスニアック2、セルビア人1、クロアチア人1）。それぞれのスタッフが違う役割を専任しているというわけではない。
- ・ スタッフの前職はエコノミスト、法律関連、農業関連。このセンターの開設に合わせて公募された。
- ・ 帰還民関連の業務を全般に行う。
- ・ 帰還民の動向をモニターしているが、まだデータベース等は構築されていない。
- ・ ローカル/国際NGO、国際機関等関係者を集めてRegional Meetingを開催している。
- ・ 雇用の確保ができれば、人々は帰還すると思われる。

訪問先：UNHCR Tuzla

日時：10月27(水) 10:00

対応者：UNHCR スタッフ

調査団：全員

調査団よりデブリーフィングを行った。

- ・ UNHCRの全面的な協力への謝意を表示。
- ・ 技術協力プロジェクトの前段階として、専門家派遣の可能性を説明。
- ・ 引き続き調査を行うコンサルタント団員への協力を依頼。

7. サラエボ

訪問先：在BiH日本大使館

日時：10月28日(木) 11:00

対応者：小滝臨時代理大使、室谷書記官、斉藤専門調査員

調査団：全員

橋本団長より調査概要を報告。

- ・ 専門家派遣の可能性への説明
- ・ C/Pとしては、サラエボ大学農学部、MHRRの可能性説明←（大使）エンティティ政府への対応は←（橋本）情報は伝える必要はあるが、国際コミュニティはその方向で動いている

訪問先：サラエボ大学農学部

日時：10月28日（木）14:10

対応者：Vjekoslav Vekoslav Selak 学部長他5教官

調査団：荒木、中谷、本郷

1. 荒木団員より、JICA技術協力と本調査の目的について説明。
2. サラエボ大学農学部より以下説明あり。
 - ・ サラエボ大学が当国最大の大学である。
 - ・ 当国の戦後の復興は進んでいるが、経済の回復は遅れている。農産物の輸出入の格差が大きく、輸入は輸出の10倍。
 - ・ 当国の農業振興のキャパシティーはある。現在栽培されている農作物は、小麦・野菜で約2,1Mha、牧草畑が約1,5Mhaあり、羊の頭数は約3百万頭である。
 - ・ JICAの援助については以前から耳にしていた。もし、当大学が関係できるのならば全面的な協力を惜しまない。
 - ・ 当国の農業関係者幹部のほとんどは当大学出身であるので、プロジェクト活動上のさまざまな調整もそう困難ではない。

訪問先：UNHCR Sarajevo

日時：10月28日（水）14:00

対応者：John Farvolden (Senior Programme Officer)、Rojer

調査団：橋本、山本、渡辺

橋本団長より本調査の結果概要を報告。

- ・ UNHCRの全面的な協力への謝意を示した。
- ・ 技術協力プロジェクトの前段階として、専門家派遣の可能性を説明。
- ・ 引き続き調査を行うコンサルタント団員への協力を依頼。

訪問先：Linking Agriculture Markets Producers (LAMP) (ヨーロッパホテルにて面談)

日時：11月1日(月) 8:40

対応者：Mr.Armin Kloeckner、Ms.Sabaheta Cutuk (政策アドバイザー室)

調査団：渡辺、中谷

1. Ms.Sabaheta が最初に来ホ、渡辺団員より当ミッションの目的を説明した。それを受けて同氏より次のようなアドバイスがあった。
 - ・ 私は 4 年前まで、ボスニア・ヘルツェゴビナ Federal Ministry of Agriculture, Water management and Forestry に勤務していた。JICA に限らず農業プロジェクトを計画している場合は、ボスニア、スルブスカの両 Ministry を訪問し、指導を受けることが大事ではないだろうか。両 Ministry には農業、林業、獣医関係の専門部署がありそれぞれ専門家もいるので全体の動向の把握も容易である。
2. Ms.Sabaheta の上司にあたる Mr.Armin が同席し、以下のようなアドバイスがあった。
 - ・ ゴラジュデで JICA のプログラムを立ち上げることは非常に結構なことである。LAMP としてはゴラジュデにはプログラムはないが、今後、さまざまな局面で双方協力できるであろう。
 - ・ 現在、もっとも悲惨な状況下にあるのはスレブレニツァであろう。私も最近現地視察を終えたところだが無いものだらけの一言である。家はあっても仕事がなければ帰還できないことは当然である。LAMP としては小規模農家支援事業を進行中だが、その中で、技術支援の分野で JICA とも相互協力できれば幸いである。トゥズラ事務所の Dennis Zeedyk は現地担当であり、現地事情にも詳しいので継続的な情報交換されることを提案する。

8. ゴラジュデ

訪問先：CARITAS Gorazde office

日時：11月1日(月) 15:10

対応者：Dr. Monique Frey (専属獣医師)

調査団：中谷

- ・ 1997 年から 2001 年までの 4 年間の間に、オランダの Dutch Relif Agency(DRA)という組織を通して約 1,000 頭のシンメンタール妊娠牛が当地に導入された。導入先はオーストリアからで、配布された場所は、Gorazde,Cajnice,Foca,Mud,Pate Municipalities である。現在の状況は、私の情報では残念ながらほぼ 80%の牛はと殺されたか売却されている。
- ・ 1998 年から 1999 年まで DRA に雇用され、2名のオランダ人技術者(農業一般)とともに

に各配布先コミュニティーを巡回指導した。方法は、

- ◇ 農家にとって最も必要な技術情報である、飼養管理、繁殖、搾乳衛生の分野について指導マニュアルを作成した。
 - ◇ 農家にとって比較的時間的に余裕のある、冬季間（12月、1月、2月）の間にセミナー期間を設けて、一回当たり約20人の農家に集まってもらった。農家が時間を割けるのは5日間が限度であるので、その期間内に講義、実習ができるよう工夫した。
 - ◇ DRAの活動は2年間、20ヶのコミュニティーへの指導で終わった。自分としては、充実した時期を過ごしたと思っている。
 - ◇ 当地には、牛の他に約5,000頭の羊も飼養されているので、羊の指導のほうが多いこともあった。
- ・ 当地の酪農家への指導はまだまだ必要である。もし、JICAが技術協力を始めるのであれば自分としてはぜひ協力したい。方法論についてもいろいろ工夫できると思う。帰還民の中には日々の生活に追われてセミナーに参加できる余裕のない人もいるので農民の選定には工夫が必要である。定住民で、4.5頭の飼養規模の農家を対象にすることも一案ではないか。

訪問先：CEFA/Agropodrina

日時：11月1日（月）16:00

対応者：Mr. Aliladic Haris (YD Director), Mr. Suad Alic (Financial expert)

調査団：中谷、渡辺

1. CEFA

- ・ イタリアの国際 NGO。現在は過去の支援のモニタリングが主な業務（例えば、Agrodrina）
- ・ パイロットスタディとして、次のプロジェクト計画は以下の通り。
 - ① 30農家を対象に1農家1/3haで計3ha。ベリー等の栽培（灌漑施設も）
 - ② 栽培結果が良い意欲的な農家にはさらに1/3haでの耕作を振興
 - ③ 育苗、栽培、収穫の3つのコンポーネントの研修を実施予定（イタリアから専門家派遣）
 - ④ イタリアからの専門家フィーは、200Euro/日、大学の先生は100Euro/日、USAID 専門家は1500\$/日（全てを含む）

2. Agropodrina

- ・ CEFA の支援を受けて 2000 年に 5 人にメンバーで Cooperative として創設
- ・ 会員は 120 名で 140 名になるだろう。イタリアと同様に円滑な運営を考えると最大 200 農家。メンバーフィーは年間 5Euro
- ・ 技術指導、集荷・販売は Cooperative の役割で、売上の 10%を徴収。寄付されたトラクター (5 台)
- ・ 設立順序 (Association と Cooperative の差は無い) は次の通り
 - ① メンバーで目的や役員、ルール等を決める
 - ② 組合名で銀行口座を開設
 - ③ Canton 政府に申請。政府が事務所やフィールド等の現状調査。そして、許可
 - ④ 社会保障番号や税金登録
- ・ 2004 年 8 月に EU 基準に準じた Cooperative の Law が執行。この法によれば、Non-Profit である NGO 等が Association (設立に 3 人以上)。他方利益を求め、5 人以上に設立者がいる場合は Cooperative である。この登録に専門家に依頼すると、1 件当たり 400Euro。
- ・ 内戦以前は、Association はステート所有。現在はメンバー所有
- ・ 30 農家を対象に 1 農家 1/3ha で計 3ha。ベリー等の栽培 (灌漑施設も)

訪問先：Veterinarinarska (家畜保健所)

日時：11月2日(火) 13:10

対応者：Dr.Enver Borovina (所長) ほか1名

調査団：中谷

- ・ Gorazde 管内は、所長の他に獣医があと一人、それに人工授精師が 4 人という体制である。現在の館内家畜頭数であれば、この人員でなんとか対応できる。
- ・ 当地の人工授精普及率は、約 60% (前頭数) で、精液はほとんど輸入物を利用している。
- ・ サラエボにバニャリカという精液代理店があり、オーストリア、ドイツ、オランダから輸入している。国産の精液もあるが品質が悪く使い物にならない。
- ・ 精液の価格は 4~15MK/本で、液体窒素等の必要管理機器の入手、補充には問題はない。精液保管器は 8~40 リットルのものまでそろえてある。
- ・ 農家への授精サービスは、要請があった時点で授精師が出向く。料金は距離には関係なく最初のサービスが 30~40MK で 2 回目からは授精するまで 10KM を徴収している。
- ・ 当地の家畜の疾病についてはそう大きな問題になるほどの事例はこれまでにはなかつ

た。牛の血液検査も巡回で実行しているが牛結核もない。羊にはブルセラがある。

- ・ 当地の牛に関する問題は、飼養管理、搾乳衛生、それにえさに関する部分である。牛舎の不衛生に起因する乳房炎が多いこと、えさについては農家が自分で入手できる材料で自己流に配合しているだけなので、飼料の栄養に偏りがあることも問題。
- ・ 技術的な支援は非常に重要である。もし、JICA が技術協力を開始するのであれば、ぜひ協力したい。当地で30年間獣医をやっているので、たいていの事情は把握している。
- ・ ワークショップ等の普及活動も非常に意義があると思う。以前、スライド等を用いて指導を行った経験もある。

訪問先：International Rescue Committee (IRC)

日時：11月2日（火）16:30

対応者：Mr. Nusret Osmanspahic (Field Coordinator)

調査団：中谷、渡辺

- ・ 1996年ゴラジュデに開設。住宅復興が主体であるが、経済開発、インフラ整備、人権等も行っている
- ・ 2-3年前には、25人のスタッフがいたが、現在は2-3人。主な関係ドナーは、EU、USAID、UNHCR（quick support fund を活用）である。
- ・ 住宅等の復興プロジェクトの手続きは次の通り。
 - ✓ EU 等が地域（ミュニシパル）を限定して、予算の大枠（工事費、事務費、NGO 費等）を提示して、NGO からプロポーザルを求める
 - ✓ NGO は指定された地域を調査して、復興計プロポーザルを提出。EU 等がプロポーザルを検討し、実施する NGO 決める
 - ✓ NGO は、実施する地域のミュニシパルと協議を行い、ミュニシパルが住民にその内容を連絡
 - ✓ NGO は受益者選定（最も困難）を行い、改修工事の設計図書及び見積もり書を策定。建設業者を応札で選定
 - ✓ 工事期間は約2ヶ月（屋内電気、水道設備込み）。平均1戸9,000Euro
 - ✓ 完了後、EU 等は最終受益者調査を行い、これが適切であったかを調査。5%以上の差異があった場合、一部支払い減額される
- ・ 材料だけ提供する self-help housing プロジェクトを行っている NGO があるが、技術的な支援ないで行うのは現実的でない

- ・ 1998年頃から、local working group returnees and reconstruction を UNHCR と OHR が議長として開催。この役割をサラエボの regional centre に移管。Regional centre が 2-3 カ月 1 回の割合で、関連ミュニシパリティ、NGO 等との協議の場を設定。
- ・ 生活支援として、ジュース加工、羊提供、牛（オランダの支援と異なり、スペインの支援で 400 頭、1 家族 4-5 頭提供、技術的な指導は地元 veterinary centre に依頼（データベースも提供）
- ・ 1,000\$ まではグラントで提供するが、それ以上で 2,500\$ までは、生産物等で半分は返却してもらう

訪問先：ゴラジュデ アグロポドリナ農業組合

日時：11月3日（水）9：00

対応者：SLAVKOPGEVAGIC 氏

調査団：中谷

- ・ 当組合は、農業の中でも果物類を中心に組合員に対して生産指導をおこなっているが生産者指導には技術的なことはもとより市場の開拓、生産物のパッキングの方法等、総合的な指導を心がけている。
- ・ 農家への指導については、ローカルガバメントも責任を果たす義務があるが、彼らは農家の立場に立とうという気持ちがない。
- ・ 最初は露地栽培のみだったが、6,7年前からグリーンハウスの栽培指導を行っている。現在 15~20 人がグリーンハウスで果物栽培を行っている。
- ・ ここまで順調に事業が進んでいる理由は、農家に対する指導の一環で、ワークショップを徹底して行ってきたことが最大の効果を生んだと考えている。ワークショップの開催は、参加する農家の選定の段階で成功か否かが決まる。ワークショップに参加する人の気持ち、つまり本当に農業をやりたいという気持ちがあるかどうかを見抜くことが大事。その次に、やりぬくだけの能力があるのかどうかを見極めることがポイントになる。前回は、最終選考に 25 名残ったが 10 人に絞った。ワークショップに関する技法の蓄積はいろいろあるので、さまざまな場面で協力していきたい。
- ・ 今年の計画として、りんごの畑近くに事務所を移転することになっている。同時に研修施設も併設することになっているので、ノウハウの情報交換ができれば幸いである。

9. スレブレニツァおよびプラトナツツ

訪問先：UNDP Srebrenica Regional Recovery Programme

日時：11月4日（木）10:00

対応者：Mr. Guy Dionne, Mr. Danijela Huseinbasic

調査団：中谷、渡辺

Srebrenica Regional Recovery Programme について

- ・ このプログラムは、スレブレニツァ、プラトナツツ、ミリチを対象。
- ・ コミュニティーは崩壊、経済活動は切断、人口減少、帰還民への対応、という大きな問題を抱えており、この地域での再建は困難（アジアやアフリカと比較して）。また、政治的な影響が大きい地域（汚職が蔓延）¹。
- ・ UNDP は、プログラムの実施を国際/ローカル NGO に通常委託しているが、信頼に足りる NGO が少ないので、コソボに次いで UNDP 直営で行っている。
- ・ ローカル NGO は 59 もあり、NGO という名前だけの団体もある、一部は犯罪集団にも関係している。
- ・ 2年前から 60 以上の住民組織づくりを行ったが、うまく行かなかった。現在、絞り込みをかけて 24 住民組織を対象に組織づくりを行っているが、難しい。
- ・ 現金収入になるということであれば、関係する住民全てが住民組織づくりに参加するが、技術研修だけでは、ほとんどの住人が参加をすることはない。従って、Srebrenica business centre（草の根無償により支援済）と共同で意欲ある篤農家を特定し、約 10 人のメンバーで組織づくり（農業生産者組合）を行っている。ベリー、酪農等の農産物の分野よりも農家の意欲や能力を優先。この 10 人が核になり、次の 10 人に技術伝達を行っていく計画（来年には 110 人に）。←過去の失敗からの教訓として、この方法でしか住民組織はできない。
- ・ 専業農家は 1%ほどである。以前は工場労働者等の兼業農家。
- ・ 住宅復興事業（80〜100 戸）は、来年から実施予定。直営で行う予定で、入札により建設会社を選定。今後、900 戸建設予定。
- ・ 緊急支援は、住宅のドア、窓の修繕（1 百万 \$ が必要であるが、200,000\$のみ確保）。
- ・ 当地において羊関連産物の競争力があるので、支援分野として有望。USAID の LAMP との連携による羊飼育は有望。当地では LAMP は活動していない。
- ・ 牛の飼育支援を行っているが、意欲ある 10 農家を選定し、器具や牛を提供（成果がうまくない場合、他の農家に使用権を移す）。←ビジネスセンターは間接的にその成果を

¹ 通訳者の話によれば、11月1日の夕方のTV番組で、この地域に280百万Euro(?)が援助されたが、その支援が住民に十分に届いてないという番組があったとのこと。

見るにはある程度の年月が必要と指摘。

- ・ 住民組織による技術普及体制づくりを計画。

訪問先：UNDP Srebrenica Regional Recovery Programme

日時：11月4日（木）11:30

対応者：Ms. Danijela Huseinbasic (Local Government Coordinator)

調査団：中谷、渡辺

- ・ 地方政府の能力向上と住民参加が重要。これを受けて、2004年4月より、生活向上プログラムを実施。
- ・ 小規模インフラ整備（農道、上水・下水道整備）、をミュニシパリティの折半負担で実施。住民からの申請（名前、内容、予算等）を受けて、検討する。住民からの労務提供が前提。この年間予算は、100,000KM。計200,000KMで実施。
- ・ 大規模なインフラ整備は別UNDPプロジェクトで実施。
- ・ 次年度は、農村アクセス道路、公共輸送整備、保健衛生を予定（予算の確保が必要）。

訪問先：Business Center Sutra

日時：11月4日（木）13:00

対応者：

調査団：渡辺、中谷

- ・ 当地への帰還民の数は2000年まではあまり多くはなかったが、2002年になってから増えてきた。その後2003年ごろから国際ドナー機関の協力で生活改善に力が注げるようになった。ビジネスセンターとしては、そのころから国際機関に当地に関する有用情報が流せるようになってきた。しかし、基本的な生活に必要なものはまだまだ不足しており、改善されるべき点が非常に多いのも現実である。上水道の設備も不十分であるし、地元のラジオ放送も復活していない。居住者にとっては陸の孤島に住んでいるに近い感覚である。
- ・ そのような状況下ではあるが、当センターはUNDPと協力して組合組織を立ち上げて、農家に対する技術指導プログラムを計画している。当面の対象農家は酪農家である。組合の仮称を、Agro community association としている。Board member や Parliament の選出等、UNDPの協力を得ながら慎重に進めてゆきたい。組合員費は5-10KMとして、将来的に安定した経営の見込める篤農家に限定した指導プログラムを作成する。

訪問先：UMCOR

日時：11月5日（金）10:00

対応者：Mr.Aleksandor Stojkravit

調査団：渡辺

- ・ 2002年から活動を。2002-03、オランダの支援（889,071\$）で82家屋の復興。内6割は、self-selpで、残りはEVC（extremely vulnerable cases）で19-65才の男性がいない世帯や女性世帯主等が対象で建設会社が改修（入札で決定）。工事の管理は次の3段階、1)屋根まで構造物（上棟）、2)内装工事、3)設備・外構、で行われる。マネジャー1名、建築技術者2名、住民担当の4名での1チームで行っている。
- ・ EU諸国は、予算の関係でプロジェクトが始まるのが6月なので、1月から4月までが調査、5月工事が始まれば、倍の家屋が同じ数のスタッフが行える。
- ・ 前者は、建設材料と大工等の工賃（3,000KM）を支払い（仮払いは受益者）。室内配線を含めて1戸当たりの建設費は、75,000KM。
- ・ 手続きは次の通り
 - ✓ ドナーがミュニシパリティ等を公示し、NGO等が調査を行い、受益者の特定を図りつつ、関連ミュニシパリティ、UNHCR、UNDP、OHRとの情報・意見交換を行って、プロポーザル策定。
 - ✓ そのプロポーザルをドナーが検討し、選定する。
 - ✓ 選定されたNGOが受益者と契約を結ぶ。ミュニシパリティから受益者リストが渡されるが、現場視察して、NGOが最終的に決定。
 - ✓ 工事完了（10家屋を1セットとしている）。受益者（そこに住んでいるかを確認して）と建設技術者がサインして、引き渡す。
 - ✓ 1,000-2,000kmを農業支援として資機材のグランド（受益者の銀行口座に振込む→受益者が資機材を購入）。
- ・ 次年度は、95家屋を予定（S:50,B:25,M:20。self-help等の割合は、同様に6:4。

訪問先：ZZ Bratunac

日時：11月5日（金）12:00

対応者：Mr. Branislav Micic (Director)

調査団：渡辺

- ・ UNDPを通じて、牛が400頭供与された、保冷库や販売先の確保できてないので、所

得向上につながってない。技術指導は、UNDP から地方政府に移管され、ほとんど受けてない。

- ・ 100 人のメンバーを対象にベリーの種子を配付して、ベリー増産 (Agros 支援)。共同出荷による価格形成力の維持←トラクター等の支援。
- ・ USAID の LAMP のセミナーには参加。
- ・ この地域の 5 つの ZZ と Agros (ベリー等の乾燥工場)、他の民間企業 ('RP' Comere)。

所感

- ・ Micic さんは、UNDP とビジネスセンターからの紹介で、非常にまじめな印象 (大学は農業を卒業)。UNDP が考えている農業コンサル協会のメンバー候補。

訪問先：Srebrenica Cooperative (ZZ)

日時：11 月 5 日 (金) 14:00

対応者：Mr.Salimovic Mirsad (president), Budiwir Maksiuovic (農業、以前 UNDP に在籍)

調査団：渡辺

- ・ ZZ のメンバーは 470 名。2002 年に設立。昨年、200 トン (リンゴ)、350 トン (梅) を出荷。3 台のトラック、4 台のトラクター、8 台の耕耘機を所有。
- ・ 来年は、5ha を借りて、生産増産。メンバーには技術指導、資機材の貸し出し、マイクロクレジット (USAID や UMCOR にクレジットの申請をしたが、直前に理由もなくキャンセル。メンバーに約束をしていたので、市中銀行から mayor の口添えで 100,000KM の融資を受けた)。メンバーには 3~4,000KM/0.2ha、無利子で農産物現物による返済。共同出荷 (販売価格の 20%を徴収)。
- ・ UNDP からの証明書無のベリーの種子提供で被害を受けた→UNDP の技術力のなさを批判。
- ・ これまでの支援内容は質問をしたにも拘わらず、不明。
- ・ 10,000Euro あれば、品質改良 (土壌、種子、肥料、防虫) が可能。
- ・ ミュニシパリティは、登録を行うにも必要であり、その支援も必要。
- ・ 技術指導は我々自身でも行える。

所感

- ・ USAID のマイクロクレジットの話が途絶えたということもあり、また、UNDP の話も併せると、既存 cooperative を対象に事業を行うには十分な注意が必要。
- ・ Cooperative に関する農家の声を聞くことが大事 (中谷団員の調査では、Cooperative への

不信の声が聞こえる)。

訪問先：OHR

日時：11月8日(月) 10:00

対応者：Mr.Darko Sekelic

調査団：渡辺

- ・ OHR は来年の 9 月か 10 月には、現事務所を閉鎖して、EU-integration として衣替えを行う予定。OHR としての調整役は、この事務所に引き継がれることを期待。
- ・ スレブレニツァ地域は、林業が基幹産業であるが、不正会計処理があったということで、国際コンサルによる監査が行われている。近日中にその報告が行われる予定。
- ・ 経済封鎖が行われた経緯を考えると引き続き、住宅復興も必要。同時に所得確保。雇用機会を増やすには、農業及び加工振興、製造業の復活が必要。

訪問先：UNHCR Srebrenica Office

日時：11月8日(月) 11:30

対応者：Mr.Meredoc McMinn

調査団：渡辺

- ・ スレブレニツァ・ミュニシパリティ人口は、6,000 人から 10,000 人といわれているが、多分 8,000 人ぐらいだろう。
- ・ UNHCR Srebrenica 事務所（現在 2 名スタッフ体制）は、年内に撤退予定。
- ・ 非常に限られているが、ローカル NGO も信頼できる団体もある。これから訪問する Skelani にある NGO もその一つ。
- ・ スレブレニツァ・ミュニシパリティにおいて、人口第 2 位である Skelani 地域は、スレブレニツァから 45km の距離であるが、同政府は開発の重点地域と考えてないようである。

訪問先：Boskovic Brankica (ローカル NGO) at Skelari

日時：11月8日(月) 13:00

対応者：Ms. Aktivnosti Vejavc, 1名ローカル農業専門家、他女性1名

調査団：Mr. McMinn (UNHCR), 中谷、渡辺

(橋本団長調査団が以前ここを訪問しているので、基本的な質問は避けた)

- ・ NGOは2002年の設立。ボランティアベースであるが、5人スタッフ。
- ・ 活動内容は、牛飼育、ベリー栽培、女性活動支援、青少年育成。
- ・ 現在、UMCORの経済活動プログラムに申請中。
- ・ Skelaniは現在2,000人が住み、1,000人が帰還することが期待される。3-400家屋の復興が必要。
- ・ スレブレニツァまでの道路(約10km)の舗装が未整備。
- ・ 市場確保が課題。
- ・ ローカル農業専門家はNGO等からの要請があれば、技術指導を農家に行う。

10. トゥズラ

訪問先：UNHCR Tuzla Office

日時：11月9日(火) 19:00

対応者：Mr. William Tarpai (Director), Mr. Midhat Mujanovic

調査団：中谷、渡辺

- ・ MHRR、Regional centre、Municipal Return Commissionの組織能力強化が課題であり、もし、JICAのC/PがMHRRであれば、その流れの中での支援なので、UNHCR的にはありがたい←(調査団)このフレームにおいて、住宅等の復興が主な役割になっているが、経済開発の役割をさらに担うのは可能か←(UNHCR)地方政府として重要な役割なので、重要なポイントである。関係者との協議は必要。
- ・ もし、JICAがこの地域に協力を行う場合、この地域にプロジェクト事務所をおくのか←何も決まってないが、通常、現地にプロジェクト事務所を開設。
- ・ オランダは次年度に住宅復興に1百万Euroを拠出予定。
- ・ スレブレニツァ地域において、農業・家畜分野において、営農指導や生産者組合づくり支援は必要。また、住宅復興や農村道路、電気等の生活インフラ整備も引き続き必要
- ・ 結果が短期的に出るこの国での協力の難しさ。
- ・ サラエボにJICA事務所が開設されるのか←JICA内の話なので、私どもには分からない。

訪問先：USAID LAMP

日時：11月9日（火）20:30

対応者：Mr.Darko Sekelic

調査団：中谷、渡辺

- ・ LAMP は、スレブレニツァ地域では、ベリー栽培を対象。
- ・ ベリー加工企業の数が増えることを期待。
- ・ LAMP も技術研修や生産者組合への支援の必要性は十分に分かっているが、LAMP として十分に対応はできてないので、JICA との補完関係は可能。
- ・ USAID は、Srebrenica Cooperative と悪い経験がある。この地域で協力可能な cooperative リストを後で送付する。
- ・ Bos-Ago-Food は、来年には研修所を建設予定なので、ここでの農業研修が可能と思われる。

11. サラエボ

訪問先：在ボスニア・ヘルツェゴビナ日本大使館

日時：11月11日（水）16:00

対応者：小滝大使、室谷書記官、斉藤専門員

調査団：中谷、渡辺

1. 中谷・渡辺より調査結果説明。
2. 大使館より以下発言あり。
 - ・ 撤退しようとしている UNHCR の総括的なレポートはあるのか。
(調査団) 現状説明のレポートはあるが、総括的なレポートは聞いたことはない。要確認。
 - ・ スレブレニツァ地域での次年度の UNDP の活動計画は？
(調査団) 住宅復旧は UNDP の役割ではないが、EU (オランダ政府) からの1百万ドルを活用して、60-70家屋を復旧。また、引き続いて、スレブレニツァ地域再生プログラム (UNDP/SRRP) を実施。
 - ・ 無償案件の可能性はあるか。
(室谷書記官) 農村アクセス道路を行うにも、国全体のマクロからの検討が必要。
 - ・ JICA がこの地域で何かを行う場合、何年ぐらいの支援になるのでしょうか
(調査団) 一般的には技術プロジェクト協力で通常3年間。2年延長して計5年間。
 - ・ スケラニを対象の一つにすることは分かるが、帰還民支援という視点からの検討が必要。

(齊藤専門員) ベリーの将来性を注意深く検討することは必要。

- ・ゴラジュデのミルゴール（酪農加工会社）がうまく運営されていないのはなぜか？

(調査団) オランダが技術指導した技術者が退職したり、所長が交代したりとマネージメントの問題が主な理由。

12. ウィーン

訪問先： JICA オーストリア事務所

日時： 11 月 12 日（金） 11:00

対応者： 村岡所長、伏見職員

調査団： 中谷、渡辺

1. 中谷・渡辺より調査結果説明。

2. JICA オーストリア事務所より以下発言あり。

- ・スゲラニを対象の一つにすることは分かるが、外務省の安全基準の確認も必要。

- ・ゴラジュデのミルゴール（酪農加工会社）がうまく運営されていないのはなぜか？

(調査団) オランダが技術指導した技術者が退職したり、所長が交代したりとマネージメントの問題が主な理由。

- ・地域の人にはミルゴールには期待しているのか？

(調査団) 期待はしている。農家聞き取り調査でも、以前あったミルクポイントがなくなり、牛乳の販売に困っているという声が多く聞かれた。

- ・仮に JICA がミルゴールをてこ入れしたとして、生乳の拡販にはつながるのか？

(調査団) 期待はできると思う。しかし、彼らの考えていることは、現在の短期保存牛乳に変えて、ロングライフ乳を生産すればサラエボを中心とする遠隔地に販路が広がるという構想であり、それが、外国産に勝てるかという部分では別問題である。

- ・ミルゴール発足当初からオランダが深く関与してきた経緯があるが、JICA がなにかする場合オランダに対する配慮の必要性もあるかもしれない。事務所として、現在のオランダの関与の程度を調べておく必要もあるだろう。

- ・とにかく、この案件はいろいろな意味で難しい場面に遭遇することであろう。走りながら修正できるような柔軟性も必要であろう。